

# 融

2021.7  
Vol.29

融合化時代の都市政策提言  
A Magazine to Propose Urban Policies  
for the Age of Fusion

ゆう Yū

特集

「古」に学び未来を想う  
— 上町台地から未来の産業都市を考える —

一般財団法人 大阪地域振興調査会  
Osaka Research Foundation for Regional Development



## 目次

ごあいさつ	石原 武政 (一財)大阪地域振興調査会 会長).....	3
発刊に寄せて	コロナを乗り越え、未来の大阪をつくる ~ウィズコロナからポストコロナへ~ 吉村 洋文 (大阪府知事).....	4
スペシャル インタビュー	2025年日本国際博覧会のこれから 森 清 ( (公社) 2025年日本国際博覧会協会 理事・副事務総長).....	6
	芸能の聖地・大阪の真相をさぐる 佐々木幹郎 (詩人).....	12
	上町台地に出現する知の拠点 西澤 良記 (公立大学法人大阪 理事長).....	17
【特集1】	テーマ/ 「古」に学び未来を想う — 上町台地から未来の産業都市を考える	
	1. 古代難波津の都市イメージを探る 積山 洋 ( (一財) 大阪市文化財協会 調査課学芸員).....	21
	2. 産業・文化の原点としての四天王寺 来村多加史 (阪南大学 教授).....	27
	3. 我が国産業復興の起点となった大阪砲兵工廠 三宅 宏司 (武庫川女子大学名誉教授).....	32
	4. 東大阪のモノづくり観光 —古代からのモノづくりの聖地を探る 足立 克己 ( (一社) 大阪モノづくり観光推進協会専務理事兼事務局長).....	35
	5. 上町台地・東大阪の先端企業 青木 豊彦 (株式会社 アオキ 会長).....	37
	6. 【現地訪問】大阪ものづくりビジネス振興拠点 ..... 事務局	40
	7. 【特別レポート】上町台地1400年の歴史と産業の遷移 吉野 国夫 ( (一財) 大阪地域振興調査会 常務理事 (株)ダン計画研究所 会長).....	43
寄稿	ポストコロナの大阪産業 小林 宏行 (大阪府商工労働部 部長).....	46
	堺の伝統産業のブランド力向上による活性化 奈良 和典 (堺市産業振興局長).....	49
【特集2】	テーマ/ 聖徳太子1400年プロジェクト 聖徳太子はいなかったか？ 上野 誠 (國學院大学 文学部教授).....	52
	奈良県における聖徳太子没後1400年に関連した取組について 中川 裕介 (奈良県文化・教育・くらし創造部 文化資源活用課 文化資源係 係長).....	54
	私たちは、歴史の続きを生きている ~聖徳太子1400年プロジェクト 八尾は聖徳太子と物部守屋~ 高尾あゆみ (大阪府八尾市政策企画部 やおプロモーション推進プロジェクトチーム 課長補佐).....	56
	聖徳太子往来の道研究について ..... 事務局	59
	まち旅ツアー (難波津、四天王寺、亀の瀬) 報告 ..... 事務局	60
	古代復元画 (早川和子) ..... 事務局	61
	芸術さろん@てらまち第3回報告..... 事務局	62
セミナー報告	聖徳太子まち旅シンポジウム2021.....	64
コラム	若者にとっての「和風」 高田 光雄 (京都美術工芸大学 教授).....	69
	「関西のインフラ強化を進める会」第9回シンポジウム 開催報告 小林 潔司 (京都大学経営管理大学院 特任教授).....	71
	和室展覧会 in ベルリン ~UTSUWA (器) プロジェクト@Berlin~ 内田利恵子 (建築設計室Morizo-).....	72
ST研究会レポート	ショッピングタウン研究会活動報告.....	75
活動レポート	様友会レポート 2025年に向けたスマートシティ化の加速 吉田 真治 (大阪府スマートシティ戦略部スマートシティ推進監).....	76
財団概要	一般財団法人 大阪地域振興調査会の概要.....	78

## ごあいさつ



昨年は新型コロナに明け暮れましたが、1年たった現在、新型コロナはまだ収まるどころか、新型株に変異してなお猛威を振るっています。ワクチン接種が進まない中、改めて疫病の恐ろしさを思い知らされた感じがします。もちろん、疫病は近年に発生したものではありません。医学が発達した今日おいてこうですから、その昔にはどんな惨状であったことかと考えると空恐ろしくなります。日本でも遅くとも6世紀半ばには天然痘が広がったという記録が残っています。それ以来、何度も大きな疫病に見舞われています。間違いなく将来、今回の新型コロナもまた、大きな疫病だったと語り継がれることでしょう。しかし、今は私たちの先祖はそんな苦しみを何度も乗り越えて、私たちにつながる歩みを築いてきてくれたことに改めて想いをいたしたいと思います。

このような状況下で、本号では改めて歴史に学びながら現在を見つめ、未来を考えるきっかけとして、『『古』に学び未来を想う』と「聖徳太子1400年プロジェクト」を2つのテーマとして取り上げました。

振り返ってみれば、歴史の流れの中で大きな革新が起こるのは、未曾有の逆境であることがしばしばありました。順調に進んでいるときには、技術も制度や仕組みも、あえて根本的に変革する必要もなく、ただ「改良」を目指して進むことができます。しかし、大きな逆境となるとそうはいきません。それまで経験し、当たり前だと思っていたことのすべてを疑う必要が出てくると言っても過言ではありません。そして、そこから新たな次世代に引き継ぐ技術や制度、仕組みが生まれてきたのです。

今、その渦中であって、私たちにはまだその新しい動きは実感できてはいません。しかし、私たちのこのもがきの中での取り組みが、新たな未来につながる息吹となることを信じ、期待せずにはられません。決して逆境を喜ぶわけではありませんが、逆境にその力があることを信じながら、この難局に立ち向かっていきたいと思えます。

本号もまた、多くの方々のご執筆やシンポジウムなどでお世話になりました。この場をお借りして、心からお礼申し上げます。

令和3年7月

(一財) 大阪地域振興調査会会長  
**石原 武政**

## コロナを乗り越え、未来の大阪をつくる ～ウィズコロナからポストコロナへ～



吉村 洋文  
大阪府知事

府民の皆さまの多大なご協力のもと、大阪府では新型コロナウイルス感染症の拡大防止と経済活動の両立に全力で取り組んできました。長引くコロナ禍の厳しい状況にあって、医療従事者をはじめエッセンシャルワーカーの方々、営業時間短縮等にご協力をいただいている飲食店等の皆さまに心から感謝を申し上げます。

一年を超える感染症のパンデミックにより、インバウンドはほぼ消失し、緊急事態宣言に伴う外出自粛等が飲食・宿泊といったサービス産業等に深刻な影響をもたらした結果、個人消費は大きく落ち込み、雇用環境の悪化を招くなど、大阪経済は厳しい環境に置かれています。このため、検査・医療体制の確保・充実とあわせて、飲食店における感染防止認証ゴールドステッカー制度や資金繰りへの支援等を通じて、厳しい経営に直面する事業者の皆さまの仕事と雇用を守る取組みを進めています。

一方、海外でのワクチンの普及や国内でも自治体等による接種が加速し、外需の伸びとともに製造業等が回復基調にあります。また、

感染終息を見通した対面サービスの回復への期待感や、テレワーク等の働き方・行動様式の変容が従来にないサービスやビジネスモデルの転換等、新しい潮流を生み出しつつあります。

ワクチンの普及は、ウィズコロナからポストコロナへの架け橋です。本府においても、府民への接種を急ピッチで進め、いまある危機を乗り越え、“ピンチをチャンスに変える”、そんな再生・成長への道筋を確かなものになりたいと考えています。

『大阪の再生・成長に向けた新戦略』はそのためのビジョンです。大阪が持つ“強みとポテンシャル”を活かして、日本の成長をけん引する東西二極の一極となる「副首都・大阪」の確立・発展をめざしてまいります。

具体的には、府内に集積する健康・医療関連産業のリーディング産業化や、世界的な需要回復を見込んだインバウンドの受入促進と国内観光の取り込み強化を図ります。また、大胆な規制緩和によるイノベーションの創出に向けたスーパーシティや、大阪ならではの有望なスタートアップを育成するエコシステムの形成、さら

にテレワークなどの新たな働き方等を通じた多様な人材の活躍促進に取り組みます。

これら再生・成長の取組みの起爆剤となるのが2025年「大阪・関西万博」です。テーマは「いのち輝く未来社会のデザイン」。本年10月からのドバイ万博等の機会を捉え、世界各国へパビリオン出展等に向けたプロモーション活動を展開します。いち早く万博を体験できる場として、仮想現実(VR)等の最先端技術を駆使した「バーチャル大阪館(仮称)」を開設し、4年後の開幕に向けた機運醸成を図ります。万博は“未来社会の実験場”です。「空飛ぶクルマ」が夢洲からテイクオフし、IoTやAIがいのちと暮らしに溶け込む「スマートシティ」が始まる。こうした斬新なチャレンジや次世代のイノベーションが創出され、参加する全ての人が主人公として“ワクワクする万博”とな

るよう取り組んでまいります。

さらに、もう一つの起爆剤として「国際金融都市OSAKA」の実現に挑戦します。デリバティブを扱う国内唯一の総合取引所や「うめきた2期」「中之島未来医療国際拠点」等のイノベーション拠点の整備効果も活かしながら、アジアのデリバティブをけん引する市場機能の創出や金融DXの取組み等を進め、内外から人材・投資を呼び込む大阪独自のエッジの効いた国際金融都市をめざします。

引き続きウィズコロナ対策に万全を期し、府民のいのちと暮らしを守りながら、ポストコロナ時代を拓く新戦略の実現に大胆かつスピーディに取り組むことで、大阪の元気と明るい未来を築いてまいります。皆様のご理解とご協力をお願いいたします。

#### ポストコロナに向けた再生・成長

##### 【経済】5つの重点分野から取組みを推進し、さらなる成長へ

###### ①健康・医療関連産業のリーディング産業化

○彩都、健都、中之島(未来医療国際拠点)など、健康・医療関連産業の世界的なクラスター形成  
○企業、大学等の集積等を活かし、健康・医療関連産業をリーディング産業として育成 など

###### ②国内外の観光需要の取り込みの強化

○百舌鳥・古市古墳群をはじめ、府内各地域の観光資源の魅力向上や食のブランディング強化  
○インバウンドの受入促進に加え市場規模が大きい国内観光需要の取り込みを強化  
○IR誘致による新たな国際観光拠点の形成 など

###### ③スタートアップ、イノベーションの創出

○「スタートアップ・エコシステム グローバル拠点都市」としての強みを活かしたスタートアップの創出拡大と国内外から人材・企業等の呼び込み  
○イノベーションの創出に向けたスーパーシティなど大胆な規制緩和の取組み  
○ICT化の促進や事業承継の強化による生産性の向上  
○海外市場の取り込みや、海外への事業展開の促進 など

###### ④新たな働き方等を通じた多様な人材の活躍促進

○国内外の高度人材の育成・活躍促進  
○テレワークの導入促進等による女性や高齢者、障がい者、若者の就業機会の拡大  
○外国人材の活躍促進による人手不足の解消 など

##### ⑤国際金融都市の実現に向けた挑戦

○大阪独自の個性と機能を持った国際金融都市として、「革新的な金融都市」や、「アジアのデリバティブ市場をけん引する一大拠点」の実現に向けた取組みを推進

##### 成長を支える都市インフラの整備

○拠点形成、スマートシティ：中之島未来医療国際拠点、うめきた2期、大阪城東部地区、夢洲、泉北ニュータウンなど  
○鉄道、道路：なにわ筋線、淀川左岸線2期など ○空港：関西国際空港の機能強化など ○港湾：港湾の機能強化など

##### 【くらし】働きやすく住みやすい、健康で快適な質の高いくらしの実現

##### 【安全・安心】経済とくらしを支える安全・安心な基盤整備

世界の課題解決に貢献し、誰もが輝く活力ある大阪の実現

大阪・関西万博の成功

日本の成長をけん引する東西二極の一極となる「副首都・大阪」を確立・発展

2020年12月「大阪の再生・成長に向けた新戦略」より抜粋



## 2025年日本国際博覧会の これから

於：Zoom

〈聞き手〉吉野常務理事



森 清

(公社) 2025年日本国際博覧会協会理事・副事務総長(取材当時)

1963年京都府生まれ。東京大学卒業後、通商産業省入省。ハーバード大学やブルッキングス研究所などでの経験を活かし、アジア・中東・アフリカとの経済協力やエネルギー協力、サイバー政策の国際的な調整業務などに従事。2017年近畿経済産業局長に就任。2019年7月から(公社) 2025年日本国際博覧会協会に出向し、理事・副事務総長を務める。現在は特許庁長官。

吉野：本日はありがとうございます。昨年にもこの時期にインタビューさせていただきましたが、コロナがさらに深刻になっているとは予想していませんでした。本日は博覧会のその後の動きとこれからについてお話を聞かせていただければ幸いです。まず、基本計画が年末に決まったと思いますので、そのあたりからお願いします。

森：あっという間の1年でした。基本計画は12月25日の理事会で承認されて公表したわけですが、会場計画が注目を浴びました。

大屋根が万博のシンボルで、あの上に上がれて初めて海の万博と感じていただける。あれは会場デザインプロデューサーの藤本さんが考案されたもので、ぜひ大屋根の上に上がって、聖

徳太子も四天王寺からご覧になっただろう海に沈む夕日を万博会場で見ていただきたい。

万博の巨大な太陽の塔がニョキっと出るところの丸い部分が50年以上の歳月を経て大屋根になった。これも面白いストーリーだと思います。

誘致のときは「非中心・離散・多様」を謳っていましたが、それを生かしつつ、「多様でありながら一つ」。コロナを経て、多様性・非中心・離散を生かしつつ「一つのつながり」。「一つ」や「つながり」というワードをそれに追加したところが、コロナを経た万博にふさわしいのではないかと考えています。

吉野：なるほど、「つながり」は非中心と親和性がありますからいいですね。最近、ターミナル



会場の大屋根イメージ HPより (提供：2025年日本国際博覧会協会)

に壁面のような巨大デジタルサイネージがたくさん出てきています。1970年との違いは、会場を歩いているだけで、そこら中にデジタルサイネージが埋め込まれている。歩いている人の関心や疑問、遊んでやろうとか、3Dやホログラムの立体が出てくる。そうした技術を企業もどこまで出してくるのか？すごく楽しみです。但し、公共空間の「図と地」が逆転する恐れもあり、普通に歩いていると、まったくデジタルサイネージを意識しない環境も出てくるかもしれません。

**森：**面白いのは、Society5.0の世界では、人間もものを考えるが、機械もものを考えるので、もしかしたらデジタルサイネージもものを考えるかもしれない。

**吉野：**それがそこら中であって、会場を歩いても道やフロアから何か言ってくる。横の壁もデジタルで、生きているものとか、そういう

ものが出てくると楽しいですね。

**森：**リアルな万博に加えてバーチャルな万博を行う。

コロナ禍の中で、モーターショーなど、展示もバーチャルでトライしようとどっとバーチャルに流れました。ただ、1年、2年を経て、最近はまだリアルへ回帰する動きが急です、やはりリアルでないと臨場感がない。

ラスベガスのCES（コンシューマー・エレクトロニクス・ショー）も揺り戻しの中でどうしていくか、議論がされています。今はバーチャルだけではなくリアルもやらなければいけないという雰囲気の中で、4年後の2025年にリアルとバーチャルが共存したどんなイベントをやるか。人間だけではなくて機械もものを考える世の中なので、リアルの中にもバーチャルとの共存があります。世界中の人や企業が、リアルとバー

チャルの融合にトライしておられますが、2025年の万博はそのさなかに開く万博だと思えます。

**吉野**：先日、関西経済同友会のMICE・IR推進委員会で、MGM（メトロ・ゴールドウィン・メイヤー）の幹部の方とZoomで話合いました。コロナ禍の1年半で大胆な損切りと手元資金をたっぷり確保してから、今は利益を上げています。フロリダは今、飛行機も週末には90%まで戻ってきた。基本はリアルをガンガンやるが、その中でリモートにもものすごくお金をかけている。日本はソフトなマニュアル主義ですが、リモートと感染対策に関するシステム投資、金のかけ方が尋常ではない。

**森**：ラスベガスのCESやバルセロナのモバイルのショーなど、海外は日本よりも進んでいる感じはありましたが、今はバーチャルとリアルをどう組み合わせるかについて、日本も海外もスタートラインに立っている気がします。バーチャル的なコンテンツは、アニメやゲームを含めて日本には優れたものがたくさんありますので、そういうものを活用する。これこそ日本が先に行ける可能性を秘めている分野だと思います。

**吉野**：コンテンツという意味では、任天堂やカプコンもありますし、ソニーは大阪のUSJ（ユニバーサル・スタジオ・ジャパン）誘致のころハリウッドに出て大失敗しましたが、今はコンテンツビジネスで最先端を行く会社になりました。それが2025年にどこまで出せるか。コンテンツの物語づくりの原点はマンガですが、その話は長くなるので止めます。

ところで、聖徳太子1400年忌に因んで、今年の9月から10月にかけて大阪市立美術館で聖

徳太子展があります。四天王寺の宝物だけでなく、聖徳太子が隋の皇帝に出した国書「日出処の天子」をタイトルにした漫画、その山岸涼子さんの原画が市立美術館で展示されます。そういう意味では、日本にはコンテンツはたくさんあります。問題はそれを見せていくところが弱い。「鬼滅の刃」は完全に世界制覇しましたから、そういうものがバンバン出てくれば楽しみです。**森**：大阪の古代史コンテンツはまさに埋もれていて、よく知られていませんが、それをうまくまとめて物語にすればすごい展示ができるかも知れませんね。ぜひ面白く盛り上げてください。我々は「TEAM EXPO 2025」プログラム（以下「TEAM EXPO」）という枠組みを作っていて、万博会場内にベストプラクティスエリアという甲子園球場の5分の1ほどの広さの会場で、SDGsの観点から優れたもの、面白いものを披露していただけます。そうした枠組みの活用も考えていただければと思います。

**吉野**：いろんな動きがバラバラでありますので、うまくまとめられれば形になるかもしれません。引き続き情報交換させていただければと思います。

**森**：未来社会の実験場ということでバーチャル万博の話をしました。そのほかにカーボンニュートラル、CO<sub>2</sub>をいかに出さないようにするか。人によってはビヨンドゼロ、カーボンをマイナスにできないかという人もいます。

また、モビリティとして空飛ぶクルマ。空飛ぶクルマはアメリカや中国では2024年にはビジネスとして立ち上げたいとしています。2025年はどういう状況か、精査しないといけないわけですが、日本で最初にやるのであれば、



飛行時の安全面も考えて水都・大阪だと以前から言っています。ぜひ万博会場で様々な空飛ぶクルマにお披露目をしてもらいたいと思っています。

**吉野**：今度の会場は海ですから、橋はあるにしても水路で大阪城まで来られますし、淀川を通れば京都まで行けますし、私は瀬戸内海が一つの肝だと思っています。関西経済同友会に広域観光委員会ができます。広域での観光は皆さんバラバラでやっていますが、広域でつながらないか。舟運をもっと活用できないか？まさに2025年に向けて何か連携ができないか。瀬戸内は一つの可能性を秘めているのではないかとと思っています。

**森**：ありがとうございます。われわれも「せとうちDMO」と話をさせてもらっています。瀬戸内芸術祭が2025年にあり、広島県の福山市も世界バラ博を2025年にやろうとしておられます。

われわれは、海の万博、空の万博と言っていますが、淀川から出て瀬戸内に広がるという、あの夢洲のロケーションを世界に対してアピールしていきたいと思っています。

**吉野**：バルセロナのときは、港の辺りは水の万博と思っていましたが、あまり海を使ったアトラクションはなかった。そういう意味では、今回は瀬戸内という絶好のフィールドがあるので、何かできそうですね。

**森**：もう一つの課題ですが、SDGsは2030年までの目標で、2015年にできたわけですが、SDGsの次につながる概念、2030年以降の人類の課題は何なのか、夢洲から世界へ発信したい

と思っています。SDGsはみんな知っていますが、その作成に絡んだ日本人はいない。これを万博で議論したいと思っています。

SDGsの概念は2010年頃にできていますので、デジタル社会の倫理みたいなもの、例えばSNSの功罪などはあまり入っていない。こういうことを日本から発信したいと考えています。ところで吉野さんは、2030年以降の人類の目標、課題についてどう考えられますか？

**吉野**：実は、同友会の未来都市委員会(大阪ガス宮川副社長)では2050年の未来展望を先日出しました。「2050年には人間がどこまで人間か」という議論もやりました。

「いのちかがやく未来」といったときに、命とは何か。医療、健康ももちろん命ですが、生きているという状態。精神や肉体を含めて、全存在をかけた話なので、それを議論するのに、2050年の社会制度がどうなるか。どこまで技術は進化するのか。

従来から未来技術のロードマップはありますが、それより、もっと根本的な、その技術が、人間を変えることによって、どういう社会、どういう意義があるのか？などを包括した(技術×哲学・倫理・宗教)のロードマップを作りましょう。いろんな可能性が見えるし、また違う未来が見えてくる。関西は歴史、哲学、宗教の本場なのでぜひ、その観点を含めていただきたいですね。

**森**：ありがとうございます。今度の博覧会は協会だけでなく、いろんな方々に主体的にやっていただきたいということで、先ほども申しましたが、TEAM EXPOを作りました。昨年秋

---

から200を超える活動を登録してもらっていて、東京オリパラが終わったら、東京だけでなく北海道から沖縄まで全国展開をして、アジアなど、国際展開をしていきたいと思っています。

上町台地でTEAM EXPOで活動をしてきている追手門学院の中高のロボットサイエンス部は、「ロボットを通じて人間の生活を豊かにしよう」というテーマで、万博で何かやりたいということで活動しています。また、中学では宮古島に修学旅行に行かれるそうで、サンゴ礁のきれいさを取り戻そうという活動をTEAM EXPOに登録してくれています。

そのほかに、この近辺では、例えば、バーチャルで東大阪や八尾の町工場を実現させる「OSAKA町工場EXPO」という活動や、大阪市立大や府立大といった大学生による万博で、学生が主役になろうという活動などがTEAM EXPOに登録されています。

まだ関西・大阪が中心ですが、200くらいの面白い活動が出てきたので、それを全国展開、アジア展開、世界展開していきたいと思っています。

吉野さん達のチームもこの枠組みの活用を検討していただければどうでしょうか。

吉野：今号のテーマは、「いにしえに学び、未来を思う」ですが、先日公立大学大阪の西澤理事長にインタビューをさせていただきました。2025年に森之宮に第一期ができますが、阿倍野の市立病院と新キャンパスは上町台地の一つの島の中の話なので、点で考えるのではなく、上町台地をシリコンバレーのような創造的エリアと考えれば、もっといろんな展開が面ででき

るのではないかと話もやったところですが。

森：私も府立大や市立大の学長さんと話をさせていただいています。まず大学生に主役になってもらって、次は高等学校、中学校、小学校にも拡げる。今の小学校高学年は4年後には中学生になりますから、そういう方々に万博で何かをつかみ取ってもらおう。70年万博がそうであったように、今回もそうであって欲しいと思います。

吉野：上町台地は5世紀の難波津の頃からものづくりの先進地で戦後、砲兵工廠出身の技術者や職人が大阪産業復興の原動力となったという話を聞きました。東大阪はその流れで発展したようですね。先日、沖縄先端技術大学院大学(OIST)の人に聞きましたが、世界の先端企業は東大阪の50人、100人の中小企業に関心を持っている。なぜかという、手仕事の職人技は機械ではできない。アイデアやシステムはシリコンバレーにあるが、ものを作るときの職人技は日本人でなければできないそうです。

森：先ほど「OSAKA町工場EXPO」の話をしました。それとは別の動きで、大正区や東大阪、八尾では今オープンファクトリーが盛んになっています。4月、5月、6月の熱中症にならない間に修学旅行や遠足、アジアの若い人たちにどんどん万博に来てもらい、万博を見てオープンファクトリーも見てもらう。上町台地も体験してもらう。そういうプログラムを作っただけだと面白いですね。

吉野：ところでパビリオンの公募についてはいかがですか。

森：企業パビリオンについては、夏に説明会を

開き、秋といっても秋深くなるかもしれませんが、公募をさせていただきたいと考えています。今は暫定的に9館となっていますが、公募を踏まえて、企業パビリオンに参加いただける方なるべく早く決めて、決まった後にじっくり建築計画を立てていただきたいと思います。私も企業を回らせてもらっていますが、関心が高い企業が出てきたのが現状です。

**吉野：**事業環境が変わっていくでしょうね。2025年に出てくるのはモノづくり企業だけでなくIT系やサービス業が多いのかと思ったのですが、関心度はどうですか。

**森：**万博は「いのち輝く未来社会のデザイン」をテーマにしています。このテーマには、今、世界中から共感が寄せられています。また、今、世界中の人や企業がバーチャルとリアルの融合というか、リアルとバーチャルの兼ね合いに悩んでおられます。イベントでも、一旦バーチャルに進んだが、また、リアルへの回帰が始まっている。そういう中で、2025年の万博がどのように進んでいこうとしているのか、皆さん関心を持っておられます。

これからも面白いアイデアを企業や大学などからいただきながら進めていきますが、一つのターゲットとして2023年度の初めに入場券の前売販売を始めたいと思っています。

そのためにも、2022年の後半から2023年の初めに、第一の機運醸成のピークを持っていきたいと思っています。そこで、日本の方はもちろんのこと、少なくともアジアの人々も前売券を買いたいとなってもらいたいと考えています。

**吉野：**そのタイミングで盛り上げていくという

ことですね。

**森：**そうです。いろんなアイデアをどんどん出していきながら、それをきっかけにして面白さのスパイラル状態にいかにかけていけるかが今後のカギだと思っています。まだ催事のプロデューサーは任命してなくて、もう少し後になるかと思いますが、今は8人のテーマ事業プロデューサー、会場デザインプロデューサー、会場運営プロデューサーといった方々がリアルで集まって議論をしています。

**吉野：**外国企業もこれからも出てくるでしょう。日本の企業が後れをとってはいけません。そういう意味で、関西の企業も最近は元気がない。

**森：**大丈夫です。関西は医療も学校も厚みがあります。リモートで仕事ができるようになると関西の魅力が増えてくると思います。今、一極だけにいるリスクを企業の方々も感じている中において、東京プラスアルファとなったときに、関西の力は逆にどんどん増える気がします。

これからはSDGsの次のステージやレガシーの中身を固めていこうと思っています。TEAM EXPO以外の枠組みや、協会主催の催事とは別に、文化団体や自治体といった方が参加できる催事の公募もしていく予定です。ぜひ、いろんな関わりの中で万博と地域の方々との結びつきを作っていきたいと思っていますので、よろしくご協力ください。

**吉野：**わかりました。お話は尽きませんが、時間が参りましたのでこれで終了させていただきます。本日は本当にありがとうございました。

文責：事務局



## 芸能の聖地・大阪の 真相をさぐる

於：大森駅喫茶ルアン

〈聞き手〉吉野常務理事



### 佐々木幹郎

1947年奈良生。同志社大学文学部哲学科中退。ミシガン州立オークランド大学客員研究員、東京藝術大学大学院音楽研究科音楽文芸非常勤講師を歴任。詩集に『蜂蜜採り』（書肆山田、第22回高見順賞）、『明日』（思潮社、第20回萩原朔太郎賞）など。評論・エッセイ集に『中原中也』（筑摩書房、第10回サントリー学芸賞）、『アジア海道紀行』（みすず書房、第54回読売文学賞）詩集『鏡の上を走りながら』（思潮社第1回大岡信賞）など多数。

**吉野：**本日はコロナ禍の真ただ中、ありがとうございます。まず、初代大岡信賞の受賞、どうもおめでとうございます。また、文士の町大森をご案内頂き、高台の八景天祖神社と地獄谷の落差に上町台地夕陽丘と空堀の共通性を感じました。大阪の河内や上町台地とのご縁が深いと思いますが、まず、上町台地の学校に通学されていた頃についてお教えてください。

**佐々木：**上町台地には高校がたくさん並んでいます。高津高校で父親が美術科の教師を長年やっていて、小学生のときに、父親に連れられて高津高校の文化祭や体育祭に行き、大きいお兄ちゃん、お姉ちゃんたちを見るのが楽しみでした。

戦争中、大阪に空襲があって、高津高校も被

災したそうですが、その高校の窓から大阪城方向を向いた焼け野原の上町台地を描いた父の絵があります。その絵は、幼稚園、小学校の頃から見慣れた絵で、父親のアトリエの正面にいつも飾られていました。その絵が僕の中の上町台地の最初のイメージです。

**吉野：**そうすると、かなり悲惨な上町台地を覚えておられる。

**佐々木：**半分、抽象画のような具象画という感じで描かれているので、悲惨さは感じませんでした。50号くらいの大きな絵で明るい色で描かれ、父親から説明を受けるまでは、それが破壊された終戦直後の上町台地の風景とは気づかなかった。それが、戦争が終わって上町台地が復活していく最初の風景だったのだと、僕の中

で強く印象に残っています。父親はそういう思いを込めて、題材に選んだのでしょうか。

**吉野**：まさに戦後の復興から上町台地の風景が始まるのですね。

**佐々木**：私は、大阪城の大手門の前にある大手前高校に通っていました。ですから10代末は、毎日、大阪城の石垣を見て暮らしたと言ってもいい。冬になると体育の時間に大阪城をマラソンで一周させられたりして、放課後は大阪城公園で遊び、青春時代を過ごした思い出があります。でも私にとっては、上町台地の文化が面白いと思うようになったのは東京に来てからです。

**吉野**：そういうことってありますね。

**佐々木**：『都市の誘惑』(TBSブリタニカ)という東京と大阪の文化を比較した本を書きました。都市として似ているところ、全く違うところをいくつかの項目に分けて、落語から歌舞伎、しょうゆ、看板などいろんな比較をやりました。近世の大阪人は上方という意識、上方が文化の中心であり、経済も大阪が中心。それが底にあったのに、近代に入ってから銀本位制が金本位制になり、経済も東京一極になり、大阪の財界は一気に力を失った。そこからガラガラと大阪の経済力が落ちていき、同時に大阪が持っていた芸術・文化や誇りも忘れていくのです。

文化や芸術は大阪とは縁のないような感じがします。芸能は近世から近代にかけて力を持っていますが、現在はどうか？芸術と文化というもっと幅広い視野をなぜ持てないのか。いつもそう思います。

**吉野**：文化不毛の地とか言われますが、文楽にしても舞楽、能、落語など伝統芸能ではそれな

りの厚みがあります。

**佐々木**：しかし、全国ベースでみると存在感があまりないという感じです。東京と大阪を比較したときに、一つ大きなことに気づきました。上町台地の文化は今の地形で考えてはいけない。積み重なった最も底にあるものの意味を考えないといけない。古代の地形は、上町台地が南の方から上に岬のように突き出ている、現在の河内平野や船場など周囲は全て海でした。

万葉集には、柿本人麻呂も含めて、いろんな人たちが「茅渟<sup>チヌ</sup>の海」を歌っている。その頃の海は、上町台地の北端、今の大阪城の先のところが入り口で、そこからずっと瀉になっている海を歌っている。あるいは茅渟の海に落ちていく夕陽を歌っている。地形を通した見方をしないと上町台地の底に積もっている文化の記憶がよみがえってこないと思います。今、残っている表面的な現代の風景、地形だけで見ていくと上町台地と河内とのつながりも見えてきません。

**吉野**：その話はシンポジウムでも出ていました。608年の隋使は日本に3か月ほど滞在するのですが、2か月は難波津の周辺で過ごし、新しい迎賓館や聖徳太子が建立した四天王寺でもてなしたようです。

最近の学説で、太子が斑鳩宮と難波津や四天王寺を往来した道が大和川に沿った八尾の渋川道であった。弓削道鏡の弓削宮遺跡も最近発掘されました。その横の大和川に沿って奈良県境の亀の瀬で一旦、陸路の竜田道になり、龍田大社につながります。

**佐々木**：亀の瀬とは何ですか。

**吉野**：亀の瀬は、昨年、日本遺産に登録されま

した。要するに、大和川の奈良県と大阪府の境目で、浅瀬になっている場所、亀石があって昔から有名です。実はここで聖徳太子が馬から下りて笛を吹いたら、信貴山の神様が猿に身をやつして亀石で踊った。そういう伝説があり、それが蘇莫者という舞楽で、四天王寺舞楽に今も伝わっています。

**佐々木**：面白いですね。私が調べたのは、道明寺の周辺ですが、現在の新大和川と石川が合流する辺りは三角州になっていて、近くに日本で最初の大橋といわれる「河内の大橋」があった。あれは当時の日本にとって凱旋門にあたるでしょうね。

**吉野**：柏原市の高井田辺りには河内六寺といって大きなお寺があって、川から船で来たときに立派なお寺、伽藍が並び建っている。今でいう高層スカイラインみたいな。そういう景色になっていた。だから外国から来た人はびっくりするわけです。

**佐々木**：私は、藤井寺に住んでいたのですが、そのあたりは近かった。自転車でよく遊びに行った場所です。河内の大橋を歌った歌があって、大好きです。かつての大橋の近くで歌垣が行われたという記録があり、そこで歌われた歌が万葉集の第9巻にあります。高橋虫麻呂の「河内の大橋を独り去く<sup>ゆ</sup>娘子<sup>をとめ</sup>を見る歌一首」です。続日本紀には河内の大橋の辺りの風景や、歌垣に参加した氏族の名前も記録されている。その中の大半が東大寺の開眼会の舞楽と音楽をつかさどっている。それが藤井寺にいた葛井氏や船氏や津氏など渡来系の豪族です。藤井寺にはその豪族の名が地名として残っています。



JR大森駅近くにて

河内と上町台地はずっとつながって古代文化を濃厚に残しています。でも大阪の歴史は難波宮が滅んでから消えますね。

**吉野**：大阪は建物だけでなく文書などもほとんど火災で焼失していますが、1499年に東大寺文書に出てきます。中世には熊野街道の発着点といわれる渡辺津や四天王寺周辺に7千戸の家があって賑わっていたそうです。7千戸で単純に一世帯5人としたら3万5千人の町があった。立派な学者がそう書いているからウソではないが、7千戸が本当かどうかで学説が分かれています…

それから約30年後の1532年には本願寺ができます。本願寺寺内町は往時1万人の都市です。

**佐々木**：本願寺の遺跡は何もないでしょう。

**吉野**：公園に石碑があるだけです。本願寺にいきなり1万人の町ができるはずがないから、四天王寺にいた人たちが、歩いても20～30分だから、当然、商売になるのならと移転したり、別宅を設けてそこで商売をしたのではないかと想像しています。

**佐々木**：上町台地で大好きなのは夕陽丘という地名。上町台地から西に下りたら昔は海だったわけで、四天王寺の門前が極楽浄土の入り口だといわれていた。この日想観という思想は、平安から中世にかけてはやった。死期を迎えた人たちが台地の西側の崖に庵をつくった。その一人が藤原家隆で、塚が残っています。

今はマンションがあり、工場が大阪湾岸に密集していても、あの崖の地形は変わっていない。夕方には上町台地の東側から西の方向へ夕陽が落ちていく。このルートを歩いたら昔の日想観という信仰形態や、その感触が今でもわかる。あれは上町台地の地形が持つ貴重な遺産だと思います。

**吉野**：上町台地最大の歴史的景観資産です。でも実際歩くと恥ずかしい景観もあります。

**佐々木**：近代に入ると、谷崎潤一郎が関東大震災の直後に関西に移住します。春琴抄では、佐吉が仕えていたお嬢さんが目を患って目が見えなくなって、お嬢さんのお世話をするために佐吉自身も針で自分の目を潰した。そういう物語。その春琴さんと佐吉の墓が夕陽丘のとあるお寺に葬られている。そのシーンから始まる。その墓はフィクションですが、今も夕日が照らしているように思えます。

近代に、上町台地で夕陽を歌ったといえば、

大阪で小さい頃を過ごした三好達治です。三好達治の有名な詩「乳母車」の中には、乳母車を押すお母さんに赤ん坊の主人公が「泣きぬれる夕陽にむかって／りんりんと私の乳母車を押せ」。そういう詩がある。「雪」という詩も有名で、「太郎を眠らせ、太郎の屋根に雪ふりつむ。／次郎を眠らせ、次郎の屋根に雪ふりつむ。」これは明らかに上町台地の上から、まち全体に雪が降り積もっていく、その風景ではないかと読み解きます。

この台地の地形が文学に与えた影響は、万葉集の歌の中からも近代詩の中からも、非常に多く取り出すことができる。そのことを大事にしなければならぬと思います。

**吉野**：今は、聖徳太子1400年忌が一つの大きなきっかけになるので、大阪には全国級の「古代の歴史がある」ということだけでも打ち出そう。とこの3月に「聖徳太子まち旅シンポジウム」というのをやりました。聖徳太子往來の道を新しい巡礼の道にしようと提言しました。608年に隋使が来たときの物語を創作講談で語ってもらい、河上麻由子先生(奈良女子大学)の講演もしました。古代東アジアの研究者で、若くてしっかり研究もされていますが古代女子コスプレなどもやる面白い人です。

**佐々木**：こういう若い人たちが出てくるのはいいですね、ただ現在の大阪はこんなことをしても発信力がない。東京に伝わってこない。聖徳太子も大事なことだと思いますが、聖徳太子1400年といっても引っかけが弱い。何でも聖徳太子になっているから、今さらで新しさが感じられない。例えば山岸涼子さんの『日出処

の天子』はいい漫画だったので、こういうものを前面に出してはどうでしょうか？

**吉野**：山岸さんには多くの世代に隠れファンがたくさんいる。最近レベレーションという6年がかりの長編を完成されました。

**佐々木**：私は山口県出身の近代詩人、中原中也の研究を専門にしています。「新編中原中也全集」を角川書店から全6巻、私の責任編集で出しています。中也記念館をつくる時も最初からかかわって、今も運営協議会の責任者になっています。中原中也賞は、今年で二十六回目、今は現代詩の新人の登竜門になっています。その経験から漫画の話をしたのです。記念館では、中原中也及び小林秀雄、同時代の文学者の展示会を企画して入館者数は年間2万人いくかどうか。全国では多い方です。しかし、これをさらに突破する方法はないかと毎回、論議しています。

ある時から、あつという間に今までよりも2万人越えの人が来るようになった。なぜか。詩人や作家が登場させた漫画やアニメが登場したからです。清家雪子さんの漫画「月に吠えらんねえ」では、北原白秋から、中也、萩原朔太郎などキャラクターとして登場して、その連中が実際にはありもしない物語を展開します。

それまで詩に興味のなかった若い人たちに圧倒的な人気で、記念館でその漫画作者の原画を展示。それまで記念館には山口の湯田温泉に来た観光客がふらっと入る程度だったが、原画展を開くと当日の朝から10代の若者たちの行列ができていたそうです。

**吉野**：それは中原中也のファンなのか、漫画フ

アンなののでしょうか。

**佐々木**：漫画のファンです。漫画のキャラクター、その原画が見られる。それだけで集まる。それで入って中原中也の原稿などを見る。文学への入り口は何でもよいのです。入り口を漫画にただで関心が広がるのが現在です。若い世代もお年寄りも漫画が好きです。今はそういう時代ですから、若い人を巻き込むアイデアが絶対必要です。

**吉野**：今回、創作講談の脚本をお願いした中野順哉さんは、バロック音楽で知られるオーケストラの代表をしていた人ですが、作家に転身して、声優劇の脚本も書いておられます。地方の市民大ホールで声優劇をしますとチケットは1時間で完売。全国から来ます。どんな田舎でも集客には全く困らないそうです。

**佐々木**：今、声優の人気はすごいですね。聖徳太子が歩いた道を見る。いくつかの箇所では原画展をやる。それを見に行くツアーを企画する。アイデアはいくらでも出てくる。遊びは文化である。という事を思いだして、やるからにはもっと本気で遊ばなければいけない。

**吉野**：いい話を聞かせてもらいました。これからは本気で遊ぶよう心を入れ替えます。

本日は楽しいお話ありがとうございました。

文責：事務局





## 上町台地に出現する 知の拠点

於：公立大学法人大阪 理事長室

〈聞き手〉吉野常務理事



### 西澤 良記

公立大学法人大阪理事長。1945年奈良県生まれ。  
75年大阪市立大学大学院医学研究科を修了後、米国カリフォルニア州立大学ロサンゼルス校留学。  
79年大阪市立大学医学部奉職、同教授、米国トーマス・ジェファーソン大学客員教授を経て大阪市立大学大学長、理事長に就任。  
19年公立大学法人大阪の理事長就任。現在に至る。

**吉野：**今日は、コロナ禍の中、面会いただきましてありがとうございます。大阪府立大学と大阪市立大学が統合する大阪公立大学の開学が来春に迫ってきました。私共の財団は、大阪商工会議所が設立され今も事務所が谷町にありますので、長年、上町台地の振興を取り上げてきました。大学が無いと言われる大阪都心部で、整備される森之宮キャンパスは大阪市にとっても大変貴重な存在になると思っています。その辺りからお聞かせください。

**西澤：**今度の立地は市大医学部から見て北へ約5キロメートル、上町台地の北エリアになります。京橋はもともと京都からの大阪城の玄関口ですから。

**吉野：**そういう意味では上町台地に大学の拠点が2つできることになります。大阪市のランドデザインでは水都の東西軸(夢洲～中之島～大阪城)にも位置付けられている重要なエリアです。

**西澤：**統合新設する大阪公立大学の開学に向けては、昨年10月に文部科学省に申請しました。面接審査がありましたが、今回はオンラインでした。今後も審査委員会からの意見に対応し、8月に許可されることを目指しています。学生募集は、大学院は夏にしないといけないので、すぐに始まりますが、学部はもう少し先で、年度内に新大学の入試を行い、来年4月に開学です。開学といっても、当面は新しい校舎がある



大学本部理事長室にて

のではなく、既存の校舎を使い分けます。

**吉野：**大学合併という事ですから大変な編成替えになるのでしょうか。

**西澤：**かなり編成替えします。例えば市大にある工学部を全て中百舌鳥に集約し、中百舌鳥にある理学部を杉本に集約いたします。時間を分けながらですが、羽曳野にある看護学部を阿倍野に移転・集約します。羽曳野にあるリハビリ・栄養は森之宮に移転します。このため羽曳野は閉鎖することになります。

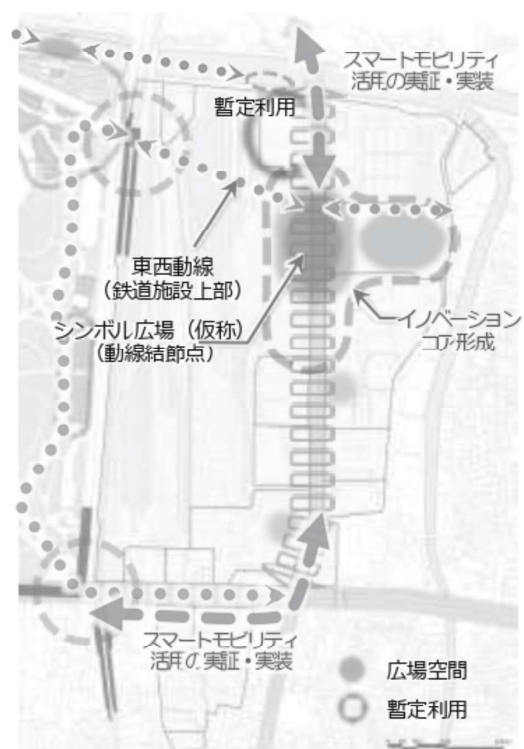
2024年から27年にかけて、中百舌鳥と杉本での移転が完了し、2025年に阿倍野地区に看護学舎、国際基幹教育機構が入る大阪城東地区に森之宮学舎を供用開始。そういう工程で、2025年に1期と称しているフェーズが終わります。その後も段階的に進めます。

**吉野：**整備移転のプログラムが大変ですね。次の第2期目標はいつ頃になりますか。

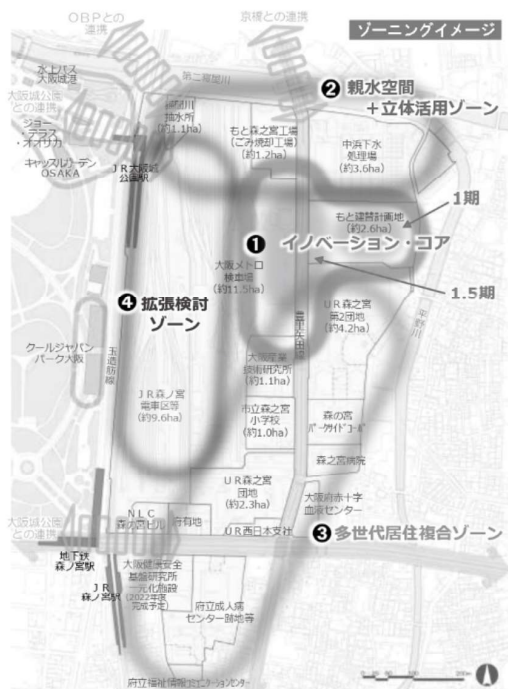
**西澤：**第2期の前に1.5期があって、大阪城東地区の森之宮 I 期学舎の隣の地所にイノベー

ション関係を集約できる学舎を予定しています。そこに情報学研究科を設置し、民間主体で建築される建物に大学が入ります。その後はメトロとJRの関係を整理しながらどこまでできるか、まちづくりと連携していくことになると思いますが、これは今後の検討になります。まちづくりは30年～50年という長期スパンの世界だから、そんなに簡単なものではないと思っています。

**吉野：**ようやく開校まで見えてきましたが、2012年の「グランドデザイン・大阪」で位置づけられてから、2016年に「大阪城東地区のまちづくりの方向性(素案)」が取りま



(土地利用計画)



段階的整備計画 1.5期  
(2025年以降できるだけ速やかに)

とめられ、2019年8月に「新大学基本構想」が公表され、2020年9月に「まちづくりの方向性」が成案となりました。長いと言えば長いですが、私どもの都市づくりの感覚ではアツという間とも言えます。まちづくりは30年単位ですからこれからが本番です。

キャンパス周辺はUR都市機構の団地ですが、URは最近、団地再生でも革新的な取り組みをしています。うめきたも事業が進みつつある今、夢洲もあります。大阪の都心で大きなプロジェクトといったら森之宮が上位にきます。

**西澤**：そうですね。キャンパス関連だけでなく再開発の余地が大きいです。特に京橋や東方面に向けて民間の大規模用地や下町が集まっています。URさんの将来構想もこれからだとは思いますが、段階的に明確になってくると思いま

す。この新しい都心のまちの大きなテーマは「大学とともに発展するイノベーション フィールド」という形です。

**吉野**：京橋ではJRさんと京阪が協働していますね。2017年に京橋駅周辺地区が都市再生緊急整備地域に拡大指定され、「京阪京橋駅周辺開発計画とイオン京橋開発計画」が動き出しています。コロナ禍の影響があるので少し不透明なところもありますが、京阪さんは2026年目標の長期経営計画で京橋の拠点開発完了を描かれています。新大学がOBPや京橋とも一体となって京橋・森ノ宮が大阪都心の新しい核になる可能性が出てきました。

**西澤**：新キャンパスから第2寝屋川に至るまちの再生と、京橋再開発をうまく連動させないといけません。キャンパスの設計はかなり進んでいます。都市整備との関係が整理できれば確定します。学舎のフロントに大きな広場を設け、知恵に見立てた柱や西日を和らげる木漏れ陽やステージのある天空広場を構想しています。

**吉野**：JR大阪城公園駅とキャンパスの間の操車場の関係はなかなか難しいところですね。

**西澤**：難しいところです。「そんなに遠くないうちに大阪城公園駅と学舎をつなぐデッキを設けたい」と折に触れて主張しております。大阪城側では、デッキと賑わい施設ができ、大きくイメージが様変わりし、駅のステータスとして変わりました。今はコロナで人は少ないですが、いい店がたくさんできて賑わいができています。この広がりがキャンパスゲートにも拡大されるような賑わいにしたいですね。

**吉野**：大阪城側の南には国のクールジャパンの

---

制度を使っのホールコンプレックス(1100席のホールと中・小ホール)ができました。あまり知られていませんが、当時の吉村市長が、オープニングの挨拶で、実はこの裏に市立大学のキャンパス計画があつて、将来は一体で文化ゾーンにしたい。とおっしゃつてました。この計画で肝となるイノベーションフィールドは、誰がどう担つていくのでしょうか？

**西澤：**基本方針はできていますが、具体的に何をどう実現するのか、その主体は誰なのかを検討している段階です。基本的に民間との連携プロジェクトとしていますが、民がこぞつて集まるような仕掛けが必要だと思つています。

**吉野：**実は4月に記者発表をしましたが、関西経済同友会の未来都市委員会(委員長大ガス宮川副社長)で「いのち輝く都市」という提案をしています。中身は2050年に向けて医療・ヘルスケアを軸に関西の都市をDXしましょうという話で、不連続な技術革新が起きるので技術だけでなく人間・哲学の研究ロードマップみたいなことも一緒にしないといけないのではないかとつてます。新たな実証・実装フィールドを整備すべきと書きましたが、具体的な中身までは書いていません。

**西澤：**夢洲の博覧会跡地でも当然必要だと思つますが、都心では森之宮がタイミング的にもふさわしい。新しい舞台の夢洲、交通結節点のウメキタとの棲み分けも考えつつ、森之宮を国際的な実証・実装フィールドに再生していく必要があります。

**吉野：**キャンパスに若い人が集まるだけではもつたないですね。阿倍野とつながる上町台地、

あるいは中之島方面につないでいく拠点。私は大阪城周辺も大事ですが、もっと広いエリア、エリア開発的な、知のエリア、それこそシリコンバレーのような規模で考えないとダメではないかと思つています。

**西澤：**本当にそうですね。京橋に向けた地区はこれから大きく開発できる余地がありますね。民間のお力をお借りしながら発展、成長できる大学のあるまち、若い人たちが集まり、イノベーションが展開され、新しい大阪の文化が生まれるまちにしたいです。

**吉野：**これから数年間が大きな山場ですね。壮大な、未来社会を牽引していくような国際プロジェクトにぜひとも育てて頂きたいと深く感じるところです。本日は長時間どうもありがとうございました。

文責：事務局

(図出典：大阪城東部地区のまちづくりの方向性  
2020年9月大阪府・大阪市HPより)

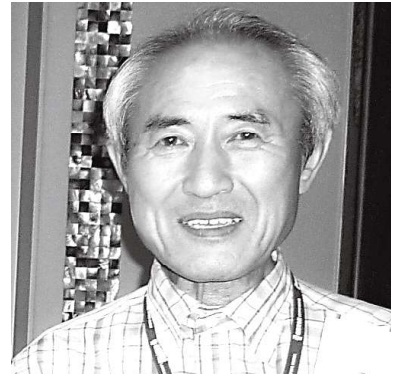


インタビュー

## 古代難波津の都市イメージを探る

積山 洋

一般財団法人 大阪市文化財協会  
調査課 学芸員



吉野：本日はコロナ禍の中ご足労頂き、ありがとうございます。先般の「聖徳太子まち旅ツアー・難波津コース」でのスペシャルトークありがとうございました。本日は難波津が単なる港ではなく、難波宮以前の5世紀から官衙やものづくりの工房が集積していた事など、新しい難波津像についてお聞かせください。大阪は商都で商売ばかりと思われていますが、水上交通の拠点だけでなく、ものづくりの産業都市としても連綿と続いていたのではないかと思います。

積山：近年、難波宮下層遺跡やモノづくり遺跡の発掘が進み、難波津のイメージが大きく変わってきました。2016年に大阪歴史博物館で開催された特別展「都市大阪の起源をさぐる難波宮前夜の王権と都市」(企画・担当は杉本厚典さん)ではそうした全体像がまとめて紹介されました。須恵器などの焼物造り、ガラス工芸、鍛冶や鹿の角細工などが古墳時代に盛んに行われていたことが判明しています。その原点になったのが、5世紀前半の法円坂倉庫群です。大阪歴史博物館とNHKの敷地で大型のクラが16棟も並んでみつかったのですが、1987年の発見から34年経った今でも、古墳時代の倉庫群としては全国的に突出した規模でして、ここに何が納められていたのか、どんな機能を果たしていたのか、とても興味がそそられます。

吉野：古代難波津は港や難波宮だけでなく、ものづくりエリアとしても大きな集積が見られますね。

積山：港湾機能とものづくり機能は一体に近いと思います。時代が古くなればなるほど、生産と流通の機能は近接、もしくは一体化していた。そういう意味では、まさに難波津とその周辺が生産の拠点であり流通の拠点だったと思います。そういうところにクラは欠かせなかったと思います。

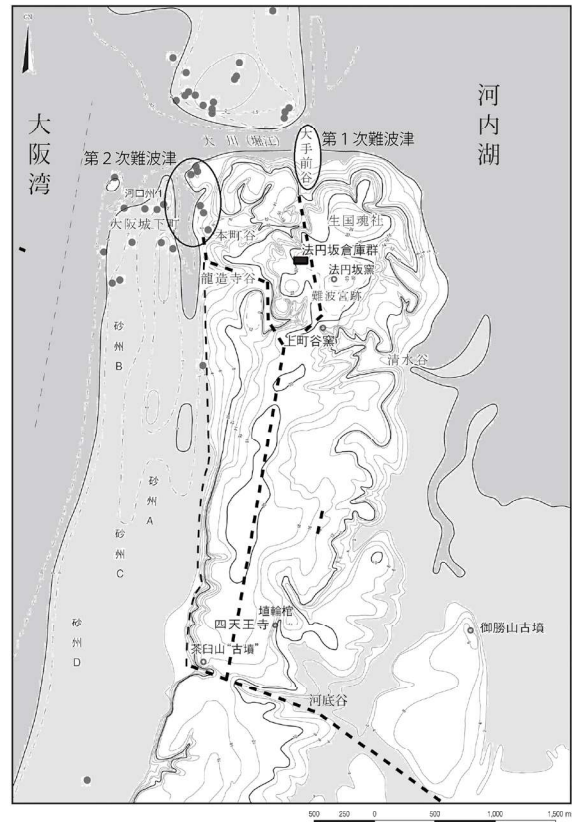
## Interview

**吉野**：倉庫群に何を置いていたかに関心があります。難波津は農作物がメインではなく、そこに工房で作ったものを置いていたり、逆に淀川や瀬戸内海から来たものを置いていたり、そういう流通倉庫の機能があったのではないのでしょうか。

**積山**：あれだけ大きな規模ですから、蔵だけがあんなところにあったというのは変だと思います。あの規模ですと、同じ場所で見つかる「難波大蔵」(前期難波宮の倉庫群)よりもだいぶ大きいんです。7世紀の王宮のクラより大きいわけですから、5世紀の頃にあれを造ったのが倭王権そのものであったらというの、諸説一致しています。すると、現地には倉庫群を管理、運営する「何か」があったはず。その可能性としてよく言われるのはオオサザキ大王(仁徳)の難波高津宮ですが、年代的にちょっと苦しいみたいです。倉庫群が造られたのは5世紀第二四半期ぐらいで、オオサザキに比定される倭王讃が南朝に使いを出したのが421年と425年。その次の倭王珍の使いは438年ですが、その間に『宋書』には年次不明で「讃が死んで弟珍が立ち、使いを出した」とか、430年に倭王の名が不明の朝貢記事なんかがあって、どちらかという、珍の方が倉庫群の建設年代に近いんです。でも、倉庫群の年代を決める出土須恵器の実年代観が充分確定していないので、まだまだどうなるか、わからないと思います。

**吉野**：オオサザキ大王や倭王の珍など、壮大な話になってきましたね。

**積山**：東西に並ぶ倉庫群の北の正面は大手前谷あたりになります。北側の難波堀江から見ると宮か何かがあって、その奥にクラがあったとい



「古墳時代の上町台地と難波津・大津道」  
(積山洋氏提供)

うイメージが描けます。

**吉野**：先日のまち歩きでお話しされた第1次難波津説もその延長線上にあるのですね。蔵と官衙、難波宮以前の宮の可能性。そこから先は想像の世界になるので、小説家や脚本家に自由に物語を創作していただき、講談、あるいは漫画やアニメに作品化すると面白いかも知れませんね。

**積山**：仁徳の伝承でしたら十分講談になるのでしょうけどね。

**吉野**：先日のシンポジウムに出て頂いた、宗田好史さんは中百舌鳥・古市の世界遺産に関わっておられましたが、倭の五王の時代と上町台地



の関係が今は切れているが本当は直結しているのではないか、とお話されていました。

**積山**：同感です。私の中では河内、和泉と難波はつながっています。摂津も、もちろんそうです。摂河泉は、もとは河内で、それが三つに別れたわけですから。その最前線が難波、奥津城が百舌鳥・古市古墳群。

**吉野**：倭の五王の時代から聖徳太子、難波宮の時代までの間、上町台地は国家レベルの位置づけにあっただろうし、難波宮下層遺跡もそうした中で理解したいですね。港、倉庫、ものづくりの工房、官衙、この4点セットで語ると実は単なる港町ではなくて産業都市ではないか。その原型が大阪にあったから、その後も連続と産業都市として発展してきたのかも知れません。

**積山**：そうだと思います。ただ、歴史の連続性という点で、中世辺りがまだあまりわかってないですから、そこがづらいところではありますね。

**吉野**：その通りです。ただ1499年の東大寺文書に、四天王寺周辺には7千軒の家、3万5千人が住んでいたと原田伴彦先生のご本に書かれています。7千は信用できないという説もあるが、私は素人考えですが、お寺だけがある門前町という規模ではない。7千より少なかったとしても、単なる門前町ではなく、ものづくりから芸能、四箇院といわれる、医療福祉施設や施薬所、行政機関もあったのではないかと想像しています。都市といえるだけの規模と都市機能が四天王寺周辺で15世紀にあったから、次の時代、蓮如さんが来たときに本願寺地内町で1万人の都市ができた。四天王寺周辺にいた人たちも、

富田林寺内町と同じように移転したのかもしれない。

**積山**：都が平安京に遷っていく際、難波宮は解体されましたが、平安時代以後、難波の都市はふたつに分裂します。一つは難波津があった大川周辺。もう一つが四天王寺周辺です。これを繋いだのが熊野街道、人口や富田林のことまではわかりませんが、仰ることは理解できます。

**吉野**：今回のシンポジウムの創作講談では、難波津に隋使の裴世清が来た時の場面から始まります。聖徳太子が往来していた難波津・四天王寺と亀の瀬の3箇所に登場するストーリーでした。難波津のものづくりに加えて産業経済まで考えると、そこに誰かが出てきてほしい。それは聖徳太子ではないような気がする。そこで活躍する役人かもしれない。

**積山**：聖徳太子ほど有名な人はいないが、渡来人の中でも百済系の人物を登場させて語らせる、というのはあるかもしれません。役人でしたら、例えば、倭人の父を持つ百済の官人で、難波館で暗殺された日羅とか。

**吉野**：5世紀から聖徳太子の7世紀初、あの当時の世界と、もう少し飛んで、高津宮の時代。そこまで下ると夢みたいな話ですが、上町台地にあったとされる仁徳さんの高津宮。これがあると物語に迫力ができますね。

**積山**：日本書紀の仁徳紀(仁徳という名前は奈良時代につけられた)など、誰も信用していなかった時代から、今は見直されつつあります。その最先端は古市晃さんかと思いますが、彼は、仁徳の本来の名である大鷦鷯(オオサザキ)大王の実在性は、かろうじてあると、それも控え

## Interview

めに言っています。その前のホムダ大王(応神)は、あまりにも物語性が強すぎるので信用できない。それに、ホムダの宮は難波の大隅宮と大和の明宮などがあったというのに対してオオサザキの宮は難波の高津宮だけです。架空の宮とは思にくい。いずれにせよ、将来どの辺りで、どの大王の宮の遺構が出てくるか、今は確定的な事は言えませんが、楽しみです。

**吉野**：誰が考えても、大阪城周辺はしっかりした地盤で、宮都を置くのであれば高い場所に置くのは当然のことでしょうね。5世紀から聖徳太子、それ以降の間はどうなっていたのですか。

**積山**：難波宮下層遺跡はずっと発展していきます。5世紀の後半に倉庫群がなくなって(たぶん移転)、その後、竪穴住居がポツポツとある。その時だけはやや寂しくなりますが、6世紀の前半頃から少しずつ増えてきて、後は発展していく一方です。ものづくり産業では、鍛冶(金属器生産)が目に見えて盛行するのは6世紀の後半です。

**吉野**：なぜ金属が盛んになったのですか。

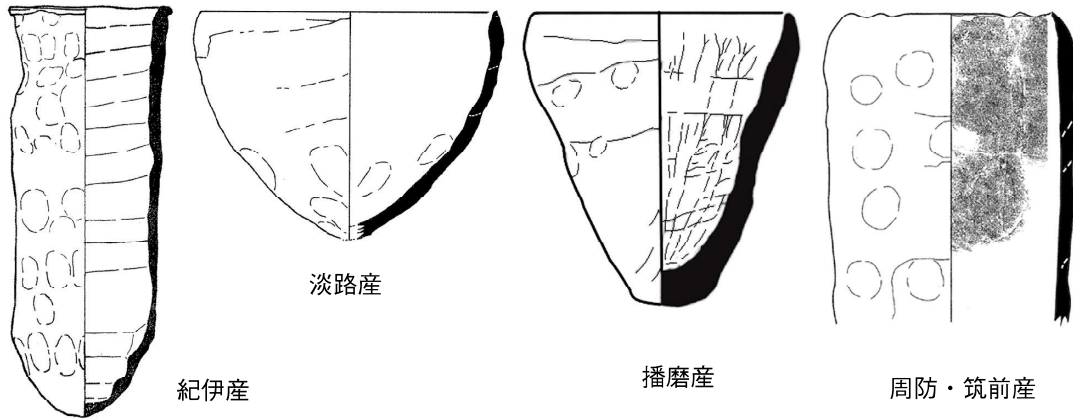
**積山**：何を作っていたかはわかりませんが、農工具は含まれると思います。日本書紀の難波屯倉や三嶋竹村屯倉(高槻市)の話では「鋤丁」(クワヨホロ)が出てきます。これは6世紀前半の話ですが、直木孝次郎先生はこの鋤を先進的な鉄製農具と考え、それを持った役夫の集団が鋤



丁だとされました。私はそのような優れた鋤などを難波宮下層遺跡で造っており、難波屯倉の農地は内陸の河内にあったと考えました。ここで造った農工具が河内や淀川ルートで東摂の高槻などに供給されてたんだらうと思うんです。もっとも、最近、栄原永遠男先生が強調されていますが、この記事の鋤(鏝)は農具ではなく土木工事の用具であり、それによって開発された難波屯倉は農業より外交・港湾機能の方が主たる役割であったという視点はとても重要で、吉野さんのお話と繋がるんじゃないでしょうか。

**吉野**：なるほど面白い話ですね。ところで昨年、道後温泉に行ったのですが、温泉組合が飛鳥の湯という新館を建てられ、法隆寺の大野管長が揮毫してくれたことを自慢されていました。生前の大野管長さんにインタビューした時、道後温泉には法隆寺の荘園があった事、昔の物部が持っていたところを引き継いだそうです。瀬戸内海は難波津が表玄関なので、荘園の生産物を





西日本各地の製塩土器(8～9世紀)

同じ土器が難波で出土するので、塩が運ばれてきたことがわかる

(積山洋氏提供)

難波津まで運んできたと思います。

**積山**：お寺の話になりますと、奈良時代の難波には天満あたりに東大寺の新羅江荘、そして西成郡には法隆寺の「庄倉」がありました。法隆寺は西摂の川辺郡・武庫郡・雄伴郡などにも庄倉があり、播磨には鵜荘という荘園や塩田らしき「海二渚」などを所有してましたから、難波の西成郡はとても重要な拠点だったはずです。大安寺だって西成郡に面積二町の庄地を持ってましたし、蘇我氏の「大津宅倉」「皇極紀」というのも難波の拠点と考えられています。また、大和の飛鳥寺は飛鳥時代から瀬戸内の備中国に大きな塩の荘園を持っています。記録はありませんが、飛鳥寺は蘇我氏の氏寺という事情からも当然、難波に拠点を構えてたことでしょう。

**吉野**：すごく重要な場所という事が想像できます。塩の道、塩と鍬が難波津を行き来していて、それを置く場所としての倉庫。何があったか、勝手に想像しないとイケないですが、少なくとも

も塩は瀬戸内海での塩の生産ともつながりますね。

**積山**：塩は軍需物資にもなります。律令政府は東北地方への侵略に際して、毎年佐渡国の塩120石を出羽国の雄勝城に送っていたという記録があります(『日本後紀』)。法円坂倉庫群は5世紀のクラですが、朝鮮半島にどんどん出兵している時代なので、塩も蓄えられていたかもしれません。でも決め手がない。穀倉説もあるし、武器庫だった可能性もあるわけです。

**吉野**：船を持って、今でいう海運業ですが、海運業が商社を兼ねていた可能性もある。要するに、運賃だけもらうのではなくて、危険料も含めて、その中から国に税を払ったりしていたのではないかと。

**積山**：海運と塩では面白い話があります。奈良時代から平安初期にかけて、畿内には山口県の周防か福岡県の筑前から塩が運ばれてきています。それはあの地方の製塩土器が難波やあちこ

## Interview

ちで出土するからわかるのですが、『続日本紀』などには全く出てこないんです。ところが、『類聚三代格』には、天平年間以来、豊前や豊後から「門司」(今の北九州市門司区あたり)の許可を得ずに、周防灘を行き来する商人たちが船で勝手に「国物」を運んで難波に集まってきたという史料があります。国物とは特産物のようなもので、その中に筑前や周防あたりの塩もあったと思います。この塩は律令政府に納める「調塩」ではなく、商品としての「私塩」です。まさに流通拠点としての難波の姿です。

**吉野**：大変興味深いお話です。昨年、瀬戸内芸術祭の北川フラムさんから「瀬戸内全書・中間報告『間』からみる瀬戸内」のお話を聞きましたが、瀬戸内は難波津こそが全ての原点だと力説されていました。難波津は国際港で渡来人の集積地ですね、百済や高句麗の集落もあったのですか。

**積山**：古墳時代には高句麗や新羅の土器は出土しないので、人もほとんど来ていないと思います。でも、伽耶や百済系の土器は出るので、来てるんだと思います。なんばパークスの南側では倭人が使う普通の土器と一緒に百済系の土器が出土していて、難波の海辺に渡来人が来ていたことがわかるんです。上町台地の東の低地は、元は「河内湖」ですが、その周辺で百済系の土器があちこちで出土していて、かなり多くの渡来人が来ていました。四条畷市薮屋北遺跡や平野区长原遺跡などがその代表例です。飛鳥時代に降れば高句麗系の瓦を葺いたお寺があるので、人も来ていたと思います。その頃になると、高句麗と倭国との関係が、いつの間にか良

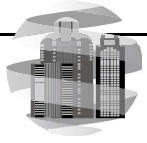
好になっている。5世紀には激しく争ったのに、不思議なものです。飛鳥時代に百済系と新羅系の土器が突出して出土するのが難波と飛鳥です。ものづくりも盛んで外交施設やお寺もあって国際色も豊かな7世紀の難波は倭国で屈指の国際都市に成長したということです。

**吉野**：聖徳太子も高句麗のお坊さんに習っていて、道後温泉に同行されたようです。

**積山**：当時は百済が高句麗と我が国の3国で連携協力して新羅と激しく争っていたようですね。その後百済が滅亡し、多くの難民が難波にもやってきたと思われませんが、その辺りの事はよくわかりません。ただ、「日本書紀」は百済滅亡後、百済王氏を難波に住ませたと記録しています。上町台地に百済寺や百済尼寺があり、「百済」という地名や駅名が残っていることから大阪の古代史は、百済抜きでは語れないと思います。

**吉野**：渡来人と上町台地のものづくりの職人や四天王寺創建に関わる技術者など、まだまだお聞きしたいことがあります。本日はここで終了させていただきます。ありがとうございました。

文責：事務局



インタビュー

## 産業・文化の原点としての四天王寺

### 来村多加史

阪南大学  
教授



**吉野**：今日はコロナ禍の中、ありがとうございます。聖徳太子創建の四天王寺について、特に四天王寺は最先端の建築技術が集約されただけでなく、工芸、ものづくり、学問、芸能文化、医療福祉など、現代に続く産業・文化の原点でもあったのではないかと、この切り口でもお伺いできればと思います。

今年3月には「古代史観光の未来展望」というシンポジウムを開催し、聖徳太子が奈良と大阪を往来していた伝承に因む新しい巡礼の旅について議論しました。講演頂いた奈良大学の河上麻由子先生は遣隋使の対等外交説について、旧来の見方を再検討する必要がある。とのご意見がありました。

**来村**：あくまでも朝貢外交であるという意見がある事は承知しています。倭の五王の時代から遣隋使においても基本的に朝貢外交ではありますが、意識としては少しでも高く見られたい。対等とまではいかななくてもバカにされたくはない。危険を冒してまであんな国書を送りつけるわけですから、そういう意識は十分あったと見

ています。今の日本も見習ってほしいですね。

**吉野**：なるほど。今は中国とは微妙な関係ではありますが、わが国の置かれた米中欧の国際環境や自主・自立という点では全く1400年前と変わっていませんね。

シンポジウムの前に難波津、四天王寺、亀の瀬の3箇所でまち歩きをしました。古代難波津では風景が全く残っていないのでリアルなまち歩き観光が本当に可能なのか、かなり大きな課題が認識できました。

**来村**：確かに大阪ではなかなか難しいですが、四天王寺の場合はいろんなものが楽しめます。私は歴史観光のツアーガイドを27年間やってきているので、何があればよいか、いくらでもアイデアというか、どこをどう案内すると面白い、十分ノウハウはあります。

ただ、参加する人は高齢が多いです。最近は若くなってきて40代、50代の人も歴史の旅に参加してくれるようになりましたが、いまだに70代、80代の人々が主流です。

**吉野**：高齢者は放っておいても情報さえ出せば

## Interview

来ていただけます。むしろ私たちは30～40代の女性をターゲットにしよう。と張り切ったのですが、なかなかうまく行きません。

**来村：**若い人もそうですが、今はネットでいろんなことを調べられます。それにプラスアルファ何ができるのか。そこに付加価値が必要です。日本書紀では四天王寺の造立が開始されたのは推古元年(593年)。難波荒陵なにわあらかと読みますが、山号は荒陵山です。いわゆる荒れた古墳ということです。

**吉野：**考古学的には620年ごろにできた、どこかで読んだことがあります。大阪歴史博物館では四天王寺の瓦が展示されていて、620年の解説がありますね。

**来村：**私は593年から着工したとの立場です。ただし、お寺は簡単には建てられなくて、そこから何十年もかかりますので、竣工までには法隆寺も飛鳥寺もかなりの時間を要しています。蘇我馬子が丁未の乱の後、法興寺(後の飛鳥寺)を建てるときに百済の職人を招いた。そこには今の棟梁に相当する人だけでなく仏像や塔の上の相輪をつくる鑄造など寺を建てるために必要な諸々の技術者を招いて建てさせたという記述がある。これは考古学で証明されていて、朝鮮式のものがかかなり出ている。

**吉野：**建物や瓦、鑄造などに百済の技術が総合的に入ってきたという事ですね。

**来村：**瓦を焼く職人には面白いネーミングがあります。宝塚歌劇に例えて「花組」と「星組」という名前を付けています。丸瓦にレンゲをあしらうのですが、普通に花びらの形をしているものと、花の先、花のかえりというか、それを丸

く意匠化したものがあります。何もないパターンと、ここにボタンみたいなものが付いているパターンと二通りあって、何もないのは花組、ポツッとあるのが星組です。

法興寺(飛鳥寺)は花組の職人が建てています。星組は推古天皇の宮の跡地に豊浦寺を建てるときに活躍しました。

**吉野：**そのときに一緒に来たのですか。

**来村：**ちょっと遅れてきたのかもしれませんが、百済の瓦職人です。星組が豊浦寺を建て終えた後、今度は聖徳太子のために法隆寺を建てる。豊浦寺、法隆寺は星組の瓦。法隆寺があらかた完成した後、最後に瓦をふきます。それが終わると用済みになりますので、その方々が四天王寺に行きます。

**吉野：**なるほど、四天王寺は法隆寺の後ですか。

**来村：**後です。これは考古学的に証明されています。620年に星組が建てたのではないのでしょうか。620年は竣工の年になります。620年は法隆寺があらかた終わった年です。その間、星組が動いています。これは百済の職人であることは間違いない。ポーンと飛びますが、それが現在も四天王寺の横にある金剛組です。

**吉野：**という事は、隋使が難波津に着いた608年には搭がなかったのですね。私は隋使がきた当時、四天王寺の建物が一定出来ていて、裴世清に自慢したと夢想しています。

**来村：**渡来した職人集団は、瓦も大工も金工職人も全部グループで動いている。星組グループです。残っているのは瓦だけなので、代表的な瓦の形式で星組とだけいっているだけです。花組グループと星組グループ、星組グループは四天王



寺が最後だったので、そこに住み着いた。古代以来の、まさしく今の金剛組に直結する話です。四天王寺は何度も焼けて建て直しています。もちろん、その間も修復が必要になるので、結果的に仕事が定期的にあったので四天王寺専属の宮大工として定着したようです。

**吉野**：面白い話ですね。一度、倒産の危機があり買収されましたが、ご当主がずっとおられ、今も正月に「ちょんな始め」(毎年1月に金堂で行われる大工職の仕事始め)を継続されています。星組と鞍作止利との関係はどうですか。

**来村**：鞍作止利は渡来系集団の棟梁で、鞍作集団は飛鳥大仏の造立に携わっています。鞍作は古墳時代の中頃からすでに来ていますが、彼らだけでは寺は建てられないので新たに馬子が職人を招聘するわけです。それまで瓦葺の建物を建てる技術はなかったの、掘立柱の檜皮葺の建物だけでした。お寺の建物は礎石の上に柱を置いて瓦を載せます。それには新たに大陸の技術が必要になる。檜皮葺の建物は神社建築ですので、仏教建築は百済の職人が建てたことは確かだと思います。

**吉野**：よく理解できました。ところで、難波津に隋使を迎えるために新館を建てたという記録があります。今回その場面を復元画家の早川和子さんに描いてもらいました。

**来村**：<sup>こまのむろつみ</sup>高麗館と難波館、裴世清を迎えた新館はその上方に建てたという記述があり、上町台地の端っこ。天満橋の辺りです。堀江に向かって下方に傾斜しているので、その下方に新羅や百済、高句麗の使者の館があり、その上段に中国から裴世清を迎えるための館を建てた。朝鮮

半島からの使者と裴世清とは扱いが全く違います。

**吉野**：そうでしたか。当時、大和の宮大工も四天王寺の宮大工も遠くに出張して建てている。出張先にその技術が伝承する場合もあるかもしれないが、ほとんどはそこで建てて帰ってくる。河内鋳物師も全国に行き、材料まで持ち込んで鐘を建てたら帰ってくるそうですね。

**来村**：それこそ出張です。そこで人を養ったり簡単に技術を渡したりはしない。1年、2年で覚えられるものではなくて、一生かけて覚えるものです。技術は秘密のものなので地元に戻したりはしない。

四天王寺は、長い間、天台宗のお寺として存続していますが、建ったときから奈良時代を通じて八宗兼学というか、宗派にかかわらないお寺、今の総合大学みたいな存在でした。

宗派ができるのは鎌倉時代以降になります。南都六宗は宗派ではなく学派です。宗派にはこだわらないので、多くのお坊さんが四天王寺に来ています。特に最澄が有名です。六時礼讃堂も元是最澄が建てたものとのことです。その後、空海、融通念仏の良忍、法然、親鸞、一遍など、オールキャストでお坊さんが四天王寺に来ています。特に親鸞は四天王寺を本拠地にして教えを広めたといわれています。

**吉野**：聖徳太子が創始されたと伝わる四箇院についてはどうでしょうか？

**来村**：寛弘4年(1077年)に四天王寺で「御手印縁起」が発見されました。体裁としては聖徳太子がお書きになったもの。となっていますが、実際は発見の頃に作られたと言われていま

す。そこに敬田院、施薬院、悲田院、療病院の記載があります。光明皇后が悲田院をつくったとも言われますので、逆に、そういった前例から、こちらで悲田院がつくられたのではないかと思います。

**吉野**：源流は大和にあったのですね。なんでも大阪が最初だと思っていましたが、やはり大和と難波・河内は一体で考えないといけませんね。しかし、大阪抜きの古代史が正史であるという風潮には疑問を感じますので大いに大阪のアピールをしていきたいと思います。

また、昨年12月に「芸術さろん@てらまち」という連続アート講座を五智光院で開催しましたが、推理小説家の有栖川有栖さんに七坂をテーマにした「幻坂」を、自然史博物館の中条学芸委員には夕陽丘の波食崖を「坂」をテーマに異業種の対談をしてもらいました。最後の挨拶で四天王寺の吉田総務部長さんが「亀井堂の石造物調査」のお話をされましたが奈良の酒船石遺跡との繋がって大変面白いですね。

**来村**：あれは四天王寺の中では最も古い石造だと思います。間違いないと思います。考古学者の中でも有名な話で、飛鳥時代のものです。見えているのは亀の受ける方だけですが、新しい亀の下に四角い水槽があって、そこから湧水が落ちてきています。

**吉野**：上町台地をめぐる巡礼としては熊野街道、熊野詣が有名です。

**来村**：平安時代の後期になると藤原道長が勢力を持ち、その後、院政に入ります。その頃に寺社詣が大ブームとなります。四天王寺だけではなく、熊野詣や長谷寺、高野山、吉野山などに

お参りする。

海に日が沈む光景は京都や奈良では不可能で、まさしく四天王寺はそれにピッタリであった。このラインをたどっていけば須磨の山になり、石の鳥居の内側から見ると正面に明石海峡、明石大橋が見えます。

日が沈むという事は人が死ぬということです。この辺りが浄土の世界で、この門は極楽の門、浄土の世界の東の門。そういう設定が生まれるわけです。そこで念仏を唱えて極楽往生しようという発想が平安時代の後期から芽生え、上皇などがスポンサーになって念仏所が建てられます。最澄や空海なども聖徳太子を理想としてあがめ、この人たちが太子信仰のベースを作っていくわけです。浄土思想と太子信仰が見事に一致したときに御手印縁起が出てきて、平安時代の終わりから鎌倉、室町、江戸にかけて、石の鳥居周辺で日想観が流行します。

**吉野**：夕陽はこのあたりならどこからでも見えますが、あの門から見るのがよかったのでしょうか。

**来村**：上町台地の筋が石の鳥居の西側にあり1mか2mほど下がる。ここが最も高い。高いところから見ると、遮蔽するものがないので大阪湾から明石海峡まですべて見えます。この内側で念仏を唱える。百万遍念仏を行うわけです。藤原家隆もその流れでこちらに来て終の棲家としました。

**吉野**：明石海峡を渡るとすぐに見えるのですか。

**来村**：真正面に見えます。ほかにビルなどはないので、四天王寺の塔だけが目立っていたと思います。塔は高いので海から見えた。大阪城が



できるまでは四天王寺の塔しか、人工物は見えなかったと思います。光はありませんが、灯台のような働きをしていた。

**吉野**：シンボリックなもので、隋使は見えていないが、その後の使者は見ている。

**来村**：飛鳥時代の終わり頃には向こうの役人も来ていますが、頻繁に来ていたのは新羅、百済、高句麗の使者で、彼らに誇る文明景観であったことは間違いないですね。

**吉野**：仏教に関わる建築や様々なモノづくり職人集団の来日は、その後の我が国の産業を大きく牽引した事は間違いありませんね。飛鳥の文明開化(大橋一章)という言葉がありますが、難波の産業イノベーションは四天王寺から始まったと言えるかもしれません。最後にこうした上町台地の産業史的な観点から取り上げるべき資源について一言アドバイスいただけませんか？

**来村**：そうですね。私は産業史の専門ではあり

ませんので、全般的な事は良く分かりません。2つだけ挙げるとすれば、1400年前の四天王寺の建築です。これは創建のところから現在にまでずっと続いてきている。金剛組や星組を軸に、関連産業や文化も横糸に語っていくと面白い産業史になるかもしれませんね。

もう一つは水です。四天王寺には各所で清水が今も湧き出ています。亀井の水盤は考古学的な位置づけだけでなく、地形学、地質学、生態学などの観点から語ることができます。西門にあった酒造業や天王寺蕪など伝統野菜なども水文化の賜物です。奈良や生駒山も含めて総合的に調べると何か出てくるかもしれません。

**吉野**：なるほど、素人発想の強引な仮説ではなく、しっかりした学術的な知見に基づいた取組が必要だという事ですね。その成果を楽しい古代史観光のコンテンツにしていく事を目指しましょう。本日はどうもありがとうございました。

文責：事務局

インタビュー

# 我が国産業復興の起点となった 大阪砲兵工廠

**三宅 宏司**武庫川女子大学  
名誉教授

1987年大阪教育大学助手を経て、1996年 武庫川女子大学、生活環境学部教授  
日本産業技術史学会 理事、事務局長、副会長を歴任  
著書に、大阪砲兵工廠の研究(思文閣出版 1993年)他  
1994年日本産業技術史学会賞



吉野：聖徳太子1400年忌を契機に、太子創建の四天王寺の時代が実は日本の産業のルーツではないか？ その次の大きな節目は明治の大阪砲兵工廠ではないかと考え、先生のお話をお聞き致したく参りました。

三宅：砲兵工廠は明治初期に設置され、約75年間操業されました。当時でも、職工さんが1万人くらいおりましたが、最盛期には約6万4000人の従業者、民間の関連工場が約600社、用地が600ヘクタールもあるアジア最大の軍事工場です。当時の日本の重工業分野の最先端の技術・設備を有していました。特に鑄造・金属加工分野では群を抜いた技術があり、鑄鉄管や橋梁などの民需が77%にも達する存在でした。

吉野：とんでもないスケールですね。大阪城・大阪府庁のそばにそれだけの土地があったという事は、上町台地の大変なポテンシャルだったのかもしれませんが。2025年に公立大学法人大阪の森ノ宮キャンパス第1期が開学しますが、周辺は今も大きな再開発候補地だといわれています。

三宅：実はそれだけの工場があるという事は、働いている人たちの生活市場が周辺で成立するという事でもあります。今のJR環状線に沿っては若年から壮年の職人の下宿屋がズラッと集まっていました。

昭和になってからは、退職した職工さんが、砲兵工廠の下請け、小さな町工場がどんどん東大阪にできました。片町から関目、門真、森口、寝屋川などで砲兵工廠の職工さんたちが所帯を持った。お父ちゃんは弁当持ちで仕事に行く。職場環境も良く日給も上で、半分公務員のエリートです。昭和10年代の半ば頃、日米戦争になる昭和15年、16年くらいが全盛期です。

戦争が始まりますと砲兵工廠の中にあった大きな工場が枚方などにどんどん移転していく。主力がどんどん郊外へ、田舎へ、もっと広いところに分所を作っていく。製造所ごと移っていく。18年、19年くらいになってくると、職工さんはどんどん兵隊に取られますから数が減ってくる。青少年、中学生、高校生がどんどん導入される。最後は女性や徴用工も導入される。





古代ものづくり遺跡分布図(提供：大阪歴史博物館)

昭和20年になったら大阪市内の生産力はガタ落ちでした。

**吉野：**私は大阪で5～6万人の技術者や職人が働いていて、戦争に負けて一気に周辺に散って個人創業や小工場になったと理解していましたが、そうではないのですね。

**三宅：**ただ、生活の基盤はある程度大阪にあったと思われまますので、戦後は大阪で就業したり、操業したりという事はあったかも知れませんが、もう一つの特色は大阪が金偏(かねへん)の鉄鋼、針金、鋳物、鍛造の町であった点です。昔から倉敷や足利、桐生、京都などは糸偏産業。大阪は金偏産業が非常に大きい。一個一個は小

さな零細企業、親方一人の町工場ですが、総体として金偏産業のまちです。

**吉野：**なるほど、古代難波津周辺ではものづくりが盛んで、6世紀から8世紀にかけて鍛造や鉄器生産の工房が集積していたので、強引ですが古代から金偏の土地だった、とも言えます。

**三宅：**住友金属や住友化学、神戸製鋼、東洋ベアリングなどは砲兵工廠の仕事をしていました。ダイキンの創業者の山田晁は砲兵工廠の技師だった。途中退社してエアコンを開発、空調機も砲弾の信管が技術基盤です。森之宮のキャンパス計画地、あそこも砲兵工廠跡で、基礎部分が出てくると思うので調査していただきたいです

## Interview

ね。古い建物を改修して使えばいいのではないのでしょうか。

吉野：砲兵工廠が戦後の新しい産業をけん引した。わが国の大きな発展の礎を作った。そういう歴史を継承し、位置づけて新たな未来を発想をしないといけないと思います

三宅：明治維新から昭和20年、この期間と現代の期間と一緒に75年と75年、ちょうど足して150年。昭和20年に戦争が終わって今75年ですから。今の若い人は何も知らないので思い入れもないと思います。

吉野：これからの教育というか普及啓発が大事ですね。大戦ですべてを失ったというのは実は嘘で、その当時の技術や職人、物資も含めて大変な財産があった。それが朝鮮特需で一気に復活して戦後の大型景気を支えたと言っても過言

ではないのですね。

三宅：日本は負けたといっても、1000万人近い軍人が全部戦死したのとは違います。大半は生き残って帰ってきているわけですから。形を変えてでも、自分の得意な分野、自分が生きやすい職業につながっている。

砲兵工廠をどう捉えるか？ 歴史にプラスやマイナスはない。史実であれば、ある人から見たときはマイナスかもしれないし、逆にプラスかもしれない。正負や明暗という面では言わない方がよいと思います。実際、この時代ではこれが事実ですから。

吉野：重いお言葉ですね。本日は大変ありがとうございました。

文責：事務局

## 大阪砲兵工廠

出典：フリー百科事典『ウィキペディア (Wikipedia)』

おおさかほうへいこうしょう  
大阪砲兵工廠は、大阪府大阪市にあった大日本帝国陸軍の兵器工廠（造兵廠）。太平洋戦争（大東亜戦争）の敗戦まで、大口徑の火炮を主体とする兵器の製造を担ったアジア最大規模の軍事工場であった。また、戦前中の日本では重工業分野においてトップクラスの技術や設備を持っていたため、おおさかりくぐんぞうへいしょう官公庁や民間の要望に応じて兵器以外のさまざまな金属製品も製造していた。最終時の名称は大阪陸軍造兵廠。



化学分析場跡。2018年現在、廃墟となっている。  
(1919年築)  
(著作権者：柿台氏、CC-BY-SA-4.0、  
<https://ja.wikipedia.org/wiki/大阪砲兵工廠>)



1945年頃の大阪陸軍造兵廠の敷地図  
(赤色の部分。道路・鉄道は現在のもの)  
(著作権者：井上弘氏、CC 表示 3.0、  
<https://ja.wikipedia.org/wiki/大阪砲兵工廠>)



インタビュー

# 東大阪のモノづくり観光 —古代からのモノづくりの聖地を探る—

足立 克己

(一社)大阪モノづくり観光推進協会  
専務理事兼事務局長



コロナ禍の真ただ中に、協会事務所を訪れた。近鉄奈良線石切駅から大阪平野を望みながら歩いた先にあるホテルセイリュウ。当然ながら人影はないが、事務所に伺うと、事務の女性とご一緒に、昔と変わらないお元気な顔があった。

この変わった名称の協会は2007年から「モノづくり観光」をキーワードに全国の修学旅行生誘致をメイン事業としてスタートした。2009年に会員32社で協議会を発足させ、2012年に

現組織になって、今に続いている。(現在約100社の会員登録)

実は沖縄科学技術大学院大学の幹部の方から、米国シリコンバレーの先端企業が東大阪のものづくり工場に関心を持っている。と聞き、航空機の部品製作で知られる会社もあることも含め、実態を聞かせてほしい。とお願ひした。お話の内容は「世の中は先端技術だけで成り立っているわけではない。ロケット～最先端技術ということだけで理解してはいけない。最先端技術を

現在の地勢



5世紀の大阪平野



(鴻池新田会所学芸員・松田順一郎氏作成)

## Interview

---

「形、にするのも、町工場の`技、あってこそ。」  
「全国の修学旅行生に日本もモノづくりの現場を、その職人のすばらしさ、その心を身体で感じてほしい」とのことであった。ここでも巷の情報と現場の実態は大いには違うのである。

もう一点、本誌のテーマが「古に学び未来を想う」という事なので、東大阪のものづくりの歴史にも関心があることを伝えると、驚いたことに2013年に「ものづくりの里を探る」と題した故坂田俊文氏(東海大学教授名誉教授)の協会主催の講演PPTを持ってこられた。また最近、近畿大学地域経済研究会で発表された「講演資料」も見せて頂いた。その最初のページは5世紀の大阪平野図(河内湖・草香江の海岸に立地する現在の事務所)や伝仁徳陵、河内鋳物師、銅鐸の写真、から始まって、弥生時代から

銅鐸や銅剣などのものづくりから始まった。と古代史談議を楽しませてもらった。

現在はコロナ禍で観光業もモノづくりの工場も大変な苦境に立たされている。2019年度は小・中・高の修学旅行生6100人を町工場に案内、2021年には5600人の予約があったのだが、すべてコロナで吹っ飛んでしまった。この状態が続けば業界全体、地域経済の危機につながると真剣な顔を見せられた。

確かにそれは否定できない現実だが、足立様の本質的なアイデア力とバイタリティを思うと全く心配していない。ワクチン接種も進んできたので、2025年博覧会に向けて、これまでの損失を倍返し、否、10倍返しに導いて頂きたい。と念じている。

聞き手：吉野常務理事



インタビュー

## 上町台地・東大阪の先端企業

青木 豊彦

株式会社アオキ  
会長



吉野：今日はありがとうございます。この号は聖徳太子1400年忌に因む特集を取り上げています。太子建立の四天王寺が実は、当時の先端産業、現代の建築・ものづくりの原点ではなかったか？ という問題意識からスタートしています。青木様のインタビューは沢山出されていますので、今日は創業から現在の会社に発展してこられたヒストリーなどをお聞かせいただきたいと思います。

青木：当社は昭和36年(1961年)に父親が東成区片江4丁目で創業しました。創業時は農機具の部品製造をやり、1年か2年後に鴻池新田に移転しました。最終的にはブリヂストンタイヤに納品されるのですが、もちろん創業当初は直接の取引ができないので、父親の仲間が応援してくれて実現したのです。今のベンチャー企業と同じで昔の職人は身銭を出してくれた。「青木さんは腕がいいから、よそに勤めずに自分でやれ」という話だったと聞いています。父親は戦争に行っていないのですが、おふくろからは、「お父さんは三井造船で軍需品を作る腕を持っ

ているから兵役を免除された。」と聞いています。

吉野：なるほど当時はそういう間接的兵役もあったんですね。

青木：父親によく言われたのは、友達だけは大事にしろという事でした。父親の友達は多くが戦死しているのです、友達に対する思いは格別だったのだと思います。僕は昭和20年の9月生まれなので一応は戦後になるが、戦後世代という感覚はあまりない。戦争が人生の出発点のような気がする。父親が、ものづくりをしていた親戚を手伝うために大阪に来たのが会社の原点です。

吉野：当時、すでに技術を持った職人として大阪に来られたのですか。

青木：当時の先端的な技術を持っていたようです。戦後、その親戚の企業が大きくなり、朝鮮戦争で儲けたことも手伝って、父親に独立しろと資金を出してくれて独立したのです。

スタートは農機具の部品製造でしたが、農機具市場が悪くなったので枚方の小松製作所さんの二次下請けになりました。その後、鴻池新田に

## Interview

移ってパワーショベルの部品を作っていました。さらに、東大阪市の楠根4丁目(大阪機械卸業団地の近く)に移転。そのときは60坪の工場で、創業時は8坪の工場、旋盤2台とボール盤2台から始めだったので大飛躍です。

吉野：目まぐるしく移転されるのですね。

青木：工場は設備と職人が命なので、建物は箱で大きさ以外どこでもいいのです。移転してからも小松さんをやっていましたが、小松さんは、当時、景気の波を大きく受けた会社で、一時は自宅待機ということもありました。それではあかんから造船の仕事に転換をした。といっても船舶で使う配管工事で使うステンレス製のフランジ(突縁)やエルボの製造です。

吉野：ようやくメーカーに成れたのですね。

青木：当当時、下請けではあかんからメーカーになろうと頑張った。部品メーカーとしてなんとかやっていたが、ある時、大変な問題にぶち当たってしまった。納品した物にクレームが出て、これはおかしいという話になった。

特殊な船に使うステンレスの配管だから絶対にさびてはいけない。それなのに錆びたというクレームがあった。ミルシート(材質証明書)を取っているのになぜか?となった。結論から言うと、委託に出していた工場のミルシートがごまかされていた。顧客先からは「損害賠償を払え」となったが、ぎりぎりの利益でやってたので、とても払えない。何度も「堪忍してほしい」と頭を下げに行った。この時は本当に情けない思いをした。自社で作ったもので、まして材料でクレームが出るなんて、加工屋だから納得できない。

吉野：とんでもない災難ですね。

青木：それが契機となって、中小企業仲間だけの仕事のやり方に限界を感じて大手企業の仕事をしようと、大転換を決めたのです。銀行も、大手企業の手形であればスッと割れる。配管工事は中小企業同士の手形だから、万が一のことがあると怖い。そこで大手企業のダイキン工業さんに飛び込んだ。それからダイキン工業さんと親しくなって、正直、ダイキン工業さんに仕事のイロハを教えてもらった。と言っても過言ではありません。

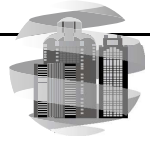
吉野：その当時の社長は山田稔さんでしたか？

青木：そうです。豪快な方で、後任は井上礼之さんが社長になられ、大変かわいがっていただきました。ある時、ロボットを始められたので、それを手伝えという事となった。ロボットのアームはアルミ鑄造で、取引していた鑄造メーカーがいつも納期に遅れ、徹夜が常態化していたのです。

吉野：当時の部品メーカーはそれが当たり前だったのですか？

青木：ある程度は我慢していたが、限界を超えていたので、「もっと早く持ってきてや。」と怒鳴り込んだら、逆に「面白い人だ」となり「飛行機をやらないか。青木さんならできるから、新明和工業さんを紹介する」との事。

紹介してもらって行ったが、取引開始までに1年かかった。国防関係だから簡単には入れない。当時の発注担当者は気骨のある人だった。1年間、毎週水曜日に通った。1時間、2時間かけて行って会ってくれるのは5分。それでもずっと行っていた。1年たったときに、「面白いや



つだ。図面は描けるか。飛行機の仕事は出せないが、見積もってみる」と言われた。

**吉野**：ようやく仕事につながったのですね。

**青木**：それは入り口に過ぎない。図面も英語だから見てもわからない。思い余って別の取引先に相談したら「これは飛行機の仕事ではないか。難しいからやめておけ。おまえの会社の設備だけでは無理だ。相手にも迷惑がかかるからやめておけ」と言われ、1年も通ってやっと図面をもらえたのに断りに行った。外注担当者は、「あんたがまじめだから見積もりを出したのに、なぜできないのか?」、「うちの設備では無理です」と理由を説明したら、「図面を読めるやないか」と一言。受けると言ったら仕事は出さなかつもりで、断ったら仕事を出そうと思っていた。「それだけ図面を見る力がある」とかわいがってくれて、そこから取引が始まった。40歳だったからもう35年になる。

**吉野**：働き盛りで、ようやく親父さんを乗り越えたのですね。そこから仕事が目まぐるしく変わっていく。

**青木**：最初は農機具、次は建機、次は造船で配管、プラントもやった。ダイキン工業さんの油圧をやって、ロボットをやって、今は飛行機、7回も変わっている。

**吉野**：その都度、変わったら前の仕事はどうされたのですか？ たっぷり儲けられた？

**青木**：恥ずかしい話、儲かっていない。なぜなら設備が変わる。設備が変わると職人の腕も変わってくる。

神戸の震災の時でしたが。顧客の工場に納品ができない。丁度わが社の工場を建てたときで、資金ショートのがれが出てきた。その時、大阪

府の人が来て、東大阪でも得意先が神戸にあれば助成金を認定できるから、東大阪市に書類を出して認定をもらえ。とアドバイスしてくれた。それで3000万円を低金利で貸してくれたから生き延びた。要は人のつながりです。儲けられないが、正直にやってきたから心配して来てくれる。振り返ってみると、よく7回も変わったと言われる。

**吉野**：偶然にも助けられながら必死に破壊と創造を繰り返す。正にイノベーション企業ですね。

**青木**：生きるための知恵。新しい技術に取り組む。今、息子は医療機器と水を始めようと研究している。今は息子の時代で、バトンタッチをして9年目になる。息子が33歳のときにバトンタッチして今は42歳。これからです。

**吉野**：2025年の国際博覧会と同時に、初の都心型大学の森ノ宮キャンパスができるので大変期待しています。歴史的にみると上町台地と東大阪は実は一体なので、東大阪のモノづくりが、国際的な先端的イノベーションエリアになる可能性があります。

**青木**：森ノ宮キャンパスができたら、京阪神の学術拠点と連携した最先端のイノベーション拠点を作るのに汗をかきたい。上町台地・東大阪を世界に直結したネットワークのハブにする。その為にやれることなら何でもする覚悟です。一緒にやりましょう。

**吉野**：すごい壮大な夢ですね。わかりました、私にできる事であれば何なりとお手伝いさせていただきます。本日は長時間本当にありがとうございました。

文責：事務局

現地訪問

# 大阪ものづくりビジネス振興拠点 ークリエイション・コア東大阪

## MOBIO（モビオ）の取り組みー



コロナ禍ではあったが、久しぶりに東大阪のMOBIO（ものづくりビジネスセンター大阪）を訪ねた。大阪メトロ中央線、相互乗入れしている近鉄荒本駅に至近で便利だが、心理的に遠く感じて、中々足が向かないのはなぜか。大阪府立中央図書館に隣接していて広域拠点ではあるが、イオンも閉鎖していて計画時に副都心と言っていたのが少し寂しい。

大阪府の商工労働部は咲洲にあるが、MOBIOは、府内ものづくり企業の総合支援拠点という位置づけで府職員などのスタッフが常駐している。ここの最大の売りはものづくり企業の【常設展示場】である。ものづくりに特化した常設の展示場としては全国最大級の200ブースを誇る。専任コーディネータによる商談サポートやMOBIO-Cafeという企業間交流会も定期開催し



常設展示場での企画展 パンフレットより

ている。もう一つの柱は【マッチングと技術開発支援】である。府のものづくり支援課や(公財)大阪産業局、(独法)中小企業基盤整備機構、東大阪商工会議所モノ造り推進室などの公的機関や近畿大学、奈良高専ほか15の大学サテライトなどが入居し、ビジネスマッチング、技術開発支援等を行っている。さながら行政によるものづくり産業振興の総合拠点になっているが、大阪都心に居ると産業創造館や「うめきた」OIH（大阪イノベーションハブ）等が目立っていて、関係者以外にはあまり知られていない。ソフト産業プラザTEQSでは【5G×製造分野】、大阪産業創造館のマーケットプラザでは【素材・加工技術系展示商談】をやっているのも、そうしたイベントとうまく連携すれば相互にWin-Winの関係ができるかもしれない。

具体的な技術開発支援、マッチングの成果について、大阪府ものづくり支援課の職員からお話を伺った。テレビで大々的に紹介されるような「キラ星の企業」はまだ出現していないが、「(株)プラ技研」(吹田市)は継ぎ目のないカテーテルで第8回ものづくり日本大賞の内閣総理大臣賞に選ばれた。世界初のマグネシウム合金ねじ、金属ガラ





スねじ、医療用ワイヤなどの開発で成功している「丸玉エム製作所」(大東市)、シリコンゴム製のグラス(コップ)を商品化した「錦城護謨」(八尾市)など、素材系の先端技術と絡めた中小企業が元気である。そういえば著名なハー

ドロック工業(株)や航空機部品の(株)アオキなどもおひぎ元で、「(一社)大阪モノづくり観光推進協会」も石切に立地しており、ここは全国級のものづくりの聖地になる可能性を秘めている。

## 【大阪・奈良の産業開発東西軸を提案する】

ここからは筆者の提案である。長年、大阪の産業振興に関する調査研究をお手伝いしてきた経験から言うと、大阪は中小企業向けの産業技術開発機関や振興拠点で全国の先頭を走ってきた歴史を持っている。大阪産業創造館は開設当時、それまでの中小企業振興センターとあまりにもかけ離れ、民間からの人材登用と破格のお金をかけた広報誌「ビーブラッツ」で知られ全国から注目された。関東の某市長がお忍びで見学され、この誌にわが市のPRをさせて欲しいとのオファーがあったという伝説が残る。

マッチングで言えば流通系ではあるが、大阪商工会議所の「買いまっせ! 売れ筋商品発掘市」等も全国ベースで知られている。また、伝統ある大阪市立工業研究所、大阪府立産業技術総合研究所(地独・大阪産業技術研究所に統合)も往時の輝きからすると少し伸び悩んでいるが、最先端の全国級機関である事に違いはない。そうした機関の集積が十分な連携を発揮して、全国・世界に知られる存在になっているか?と問われれば、まだ不十分な面があると言わざるを得ない。

2025年の国際博覧会に向けて、こうした大阪のものづくりや産業振興は格好のチャンスに巡り会っているのではないかと。大阪初の都心型

大学キャンパスが森ノ宮に開学(第1期)するのも同じ年である。※本誌の公立大学法人大阪 西澤理事長のインタビュー記事参照

一帯は京橋を含む都市計画としても注目すべき開発であるが、私は何より大阪メトロ中央線に沿った拠点であることに注目している。つまり、大阪府大・市大の新拠点がそこに出来るという事だけでなく、その地が大阪都市圏の産業振興における戦略的東西軸上にあり、要の石にあるのではないかと。という視点である。

①②【臨海部】 博覧会のある夢洲はその跡地を例えばライフサイエンスを目玉にした複合機能エリアにしようという話があり、IRでは本格的な国際展示場計画がある。咲洲には大阪府商工労働部、大阪市経済戦略局、TEQS、大阪デザイン振興プラザ、インテックス大阪が立地。

③【堺筋本町～谷町四丁目】 このエリアは産業創造館、マイドーム大阪、大阪商工会議所、近畿経済産業局、中小企業基盤整備機構近畿本部などがある。旧きを尋ねると近隣には「舎密局、浪華仮病院」があった。

④【森ノ宮】 ここは大阪産業技術研究所森之宮センター、造幣局、公立大学法人大阪森ノ宮キャンパス計画がある。旧きを尋ねると、こ

こは、大阪砲兵工廠(従業者6.4万人)の従事者が城東・東成・生野区で創業、工場拡大で東大阪に転出。これがものづくり大阪の原点となる。

- ⑤【荒本】MOBIO 大阪府立中央図書館
- ⑥【石切】大阪モノづくり観光推進協会と、ものづくり職人・匠の集積
- ⑦実は大阪メトロ中央線・近鉄けいはんな線は、けいはんな学研都市から京都につながる計画もある。

【けいはんな学研都市】国立国会図書館関西館、NICT情報通信研究機構、国際高等研究所、ATR国際電気通信基礎技術研究所、奈良

先端科学技術大学院大学、RDMM支援センター、地球環境産業技術研究機構、理化学研究所けいはんな地区などが集積し京都大学とのアクセスも良好である。

これらを地図に落としてみると、大阪メトロ中央線・近鉄けいはんな線に見事に沿っていて、大阪産業の戦略的東西軸を形成するのではないか？と考えた次第である。荒本は東大阪の重要な拠点であるし、森ノ宮は実は、大阪都心と東大阪、けいはんな、そして夢洲・咲洲を東西に結ぶ先端産業軸の「扇の要」になる可能性をもっているのではないか？



東西7拠点を結ぶ京都・奈良・大阪の産業東西軸(大阪メトロ中央線)

少し大風呂敷かも知れないが、こうした視点からの世界戦略を考えることを提案したい。シリコンバレーの規模を考えると各機関が点で頑張っても到底太刀打ちできないが、実は東大阪の職人工場が世界最先端の外国企業と取引して

いる例もあるので、これをさらに進め、どんどんビジネスを展開して、世界に冠たる阪奈産業軸を構想してみてもどうか。

文責：吉野常務理事

寄稿

## ポストコロナの大阪産業

## 小林 宏行

大阪府商工労働部長



## ◇はじめに

新型コロナウイルス感染症の世界的な流行は、社会経済の様々な面に大きな影響・変革をもたらしている。大阪も例外ではない。これまで大阪の成長を支えてきたインバウンド需要の消滅によって、観光を中心とする運輸、宿泊業をはじめ、時短要請等による飲食業などへの影響は甚大である。一方で、ニューノーマルとも呼ばれる新しい生活様式が人々の生活に浸透しつつある。近年のデジタル技術の進展と相まって、非接触・非対面のビジネスが広まり、テレワークなどによる巣ごもり需要は、新たな市場を生み出している。

## ◇ポストコロナの大阪産業

こうした対極的な様相は、いわゆるK字経済とオーバーラップしている。今後、ワクチンの接種率向上により、社会経済活動のギアチェンジが進めば、苦境の業種の需要反転も見通せるだろう。ここでは、さらにもう少し長いスパンで、サステナブルな大阪産業の発展に必要な要素について考えてみたい。

## 1. 中小企業の経営革新

コロナ禍は中小企業に2つのインパクトを与えた。

1つは、テレワークやオンライン商談が日常化し、製造分野でもリモート管理やロボット導入などが積極的に検討されるなど、デジタル社会への対応を余儀なくされたこと。もう1つは、コロナ禍によって経営環境が激変し、6割を占めるといわれる高齢経営者に、廃業を含む後継者選定などの事業承継問題を呈したことである。

こうした課題にしっかりと対処していくことは、中小企業の企業活動を支える上で重要と認識している。

大阪府では、「大阪DX推進パートナーズ」を設立・拡大し、民間ITベンダーや大阪産業局の協力を得て、課題解決の提案、社内DX人材の育成支援など、生産性向上につながる中小企業のDX支援メニューを今年度強化した。また、事業承継では、若い跡継ぎ世代が“新たな創業”のような進取の経営意欲を持てることが大切である。価値ある経営資源を次世代に引き継げるよう、府では国が大阪商工会議所内に設置した



「大阪府事業承継・引継ぎ支援センター」と連携するとともに、M&Aなど民間のスキルも活用した第三者承継についても、大阪産業局と連携し、取組を強化したい。

## 2. スタートアップ・エコシステムの確立

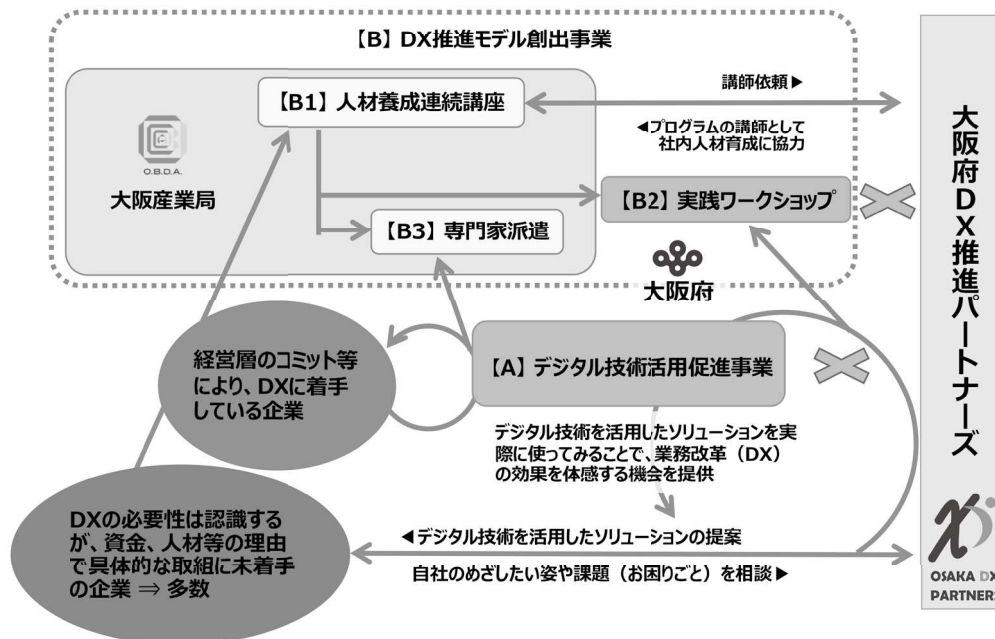
昨年、スタートアップ・エコシステム拠点都市に京阪神が選定され、産学官によるコンソーシアムが機能し始めた。また、社会実装に向けての実験場となる2025年の大阪・関西万博を捉え、大学発ベンチャーやベンチャーキャピタルの活動も活発になっている。①革新的な技術開発、②社会実装に向けた製品化・実用化、③

これらの成功による投資家やアクセラレーターの誘引、④ベンチャーの成長、スタートアップの大阪定着、こうした自律的な好循環(エコシステム)を生み出すことが、大阪を牽引する新たな産業の創出にもつながる。

幸い大阪には多くの大学や研究機関があり、来年には大阪公立大学の統合も予定されている。新大学の新たな機能として「技術インキュベーション」が掲げられており、多彩な学部の強みを持ち寄り、従来の大学の枠を超え、産学連携が推進されれば、そこで得られる相乗効果は、大阪産業の競争力強化にも寄与するはずである。

# 令和3年度 大阪府DX推進イメージ

・2020年3月、大阪府は、AI・IoT等のデータやデジタル技術を活用したソリューションを提案しうる企業（20社）と事業連携協定を締結。DXに関する府内中小企業の真のお困りごとに対し、解決策を支援するプラットフォーム「大阪府DX推進パートナーズ」を創設。現在、91事業者が参画。  
・限られたリソースの中、ソリューションの導入・運用支援をワンストップで実施。

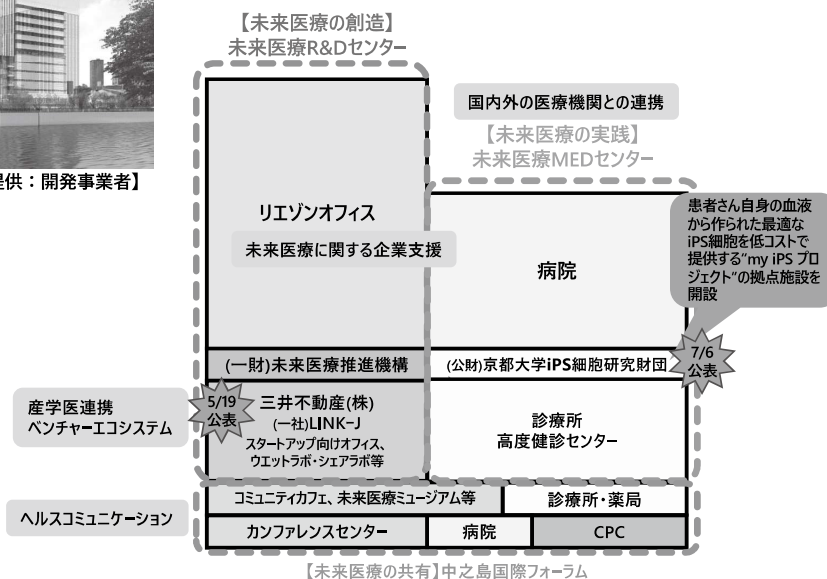


未来医療国際拠点 ～施設イメージ



※堂島川対岸から見た外観【提供：開発事業者】

再生医療をベースに、最先端の「未来医療」を産業化し提供するこれまでにない施設を目指す



3. 成長産業の伸張

大阪には、未来社会の成長を牽引する有望な産業が多数ある。

ライフサイエンス分野では、北大阪地域を中心とした先進医療や創薬などの集積群、中之島で整備が進む再生医療の一大拠点となる未来医療拠点、さらにヘルスケア産業の振興等、成長のポテンシャルが多く秘められている。これらの推進に向けた環境整備が重要だ。

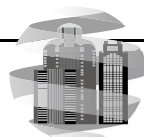
また、新エネルギー産業も有望な分野である。カーボンニュートラルが世界的潮流となる中、大阪は従前から燃料電池の技術開発、水素エネルギーの活用に注力してきた。万博も控え、例えば、高性能の燃料電池が開発されることで、水素船や空飛ぶクルマなどへの実装、さらに部品産業や基

礎技術産業を担う大阪の中小企業のビジネスチャンスを広げるものである。大阪産業技術研究所もこうした研究開発に貢献できるよう与したい。

◇むすびに

ポストコロナの大阪産業の起爆剤として、2025年の万博は大きな意義をもつ。万博の主催組織である「2025年国際博覧会協会」では、PLL (Peoples' Living Lab) と称し、未来社会の実験場に相応しい、会場で展開する民間からの提案を募集した。これらが会場で花開き、大阪の中小企業やスタートアップもその一翼を担い、その後の社会実装、新たな大阪の産業の幹となることを期待している。

以上



寄稿

## 堺の伝統産業の ブランド力向上による活性化

奈良 和典

堺市産業振興局長



「ものの始まりなんでも堺」と言われ、古代より豊かな歴史文化を生み出してきた堺市。

4～5世紀には、クフ王のピラミッド、秦の始皇帝陵と並び世界三大墳墓とされている仁徳天皇陵古墳をはじめとする百舌鳥古墳群が築造されました。

中世には海外交易の拠点として、「自由自治都市」を形成し、「東洋のベニス」といわれるなど、わが国の経済、文化の中心として繁栄してきました。

現在では、伝統産業から優れた先端技術を有する企業まで、幅広い分野の企業が数多く立地し、全国でも屈指の産業集積を有しています。

とりわけ伝統産業は、歴史や文化と密接な関係があり、古墳の築造に用いられた鍛冶の技術が、近世には鉄砲に、近代には刃物や自転車の製造に受け継がれるなど、堺市の基盤産業であるものづくりの象徴的存在です。

堺市は、「打刃物」や「注染(浪華本染め)」「線香」などの伝統産業の産地です。

その伝統産業は、例えば、注染では、海外の

有名アパレルブランドから生産依頼があったり、刃物では、著名な料理人からその品質を認められ、和食の料理人から厚い信頼を得ていたり、確かな技術力やその品質は各方面から高く評価されています。

しかし、堺市内の伝統産業事業者の多くは、OEMやB to Bによる事業展開を主に行っており、それゆえに一般消費者が手にしたとき、その商品が堺でつくられた伝統産品であることを認知されていないことがあります。また堺市民であっても、それが堺の伝統産品であることをよく知らないとも耳にします。

百貨店で販売されている色鮮やかな浴衣。販売している会社を見ても、東京の会社の名前が書かれています。堺の名前はどこにも出てこない。しかし、実際には堺市内の注染工場で、国の伝統工芸士に認定されている職人が心を込めてつくっている。そんな事例が多々あります。

これまではそれでもよかったのかもしれませんが、しかし、新型コロナウイルス感染症の影響が続くなか、いわゆる「待ち」の事業形態では

## Contribution

なく、新しいニーズに沿った自社商品の開発や、積極的な販路開拓などが求められています。

そこで、堺の伝統産品について、堺で生産されていること(メイドイン堺)を多くの人に知ってもらい、堺の伝統産品のファンを増やすことや伝統産品の価値をさらに高められないかなど、業界の方々とともに「伝統産業のブランド力を向上する」取組みを進めています。

令和3年度は、これまでOEMやB to Bを主にやってきた市内の伝統産業事業者に対し、「ブランドコンセプトの構築、消費者ニーズの把握、商品改良、商品PR、首都圏やオンラインでの販路開拓、流通」までの一貫したブランドプロデュース(ブランディング)を、各業界の専門家のアドバイスのもと支援します。

これは、前向きにチャレンジする個社の取組みを支援するほか、構築したブランドコンセプトの傘のもと、伝統産品のブランド力向上への取組みで、個社から業界、ひいては市のブランド力の向上にもつながると期待しています。

具体的なブランドコンセプトの構築はこれからですが、堺の伝統産品の特長と、コロナ禍でのおうち需要、巣ごもり需要の増加を踏まえたものにしていきたいと考えています。



①刃物



②注染



③線香

これらを踏まえて、『暮らしの質』への関心が高い人」をアプローチしたいターゲット層と考え、事業展開していきます。

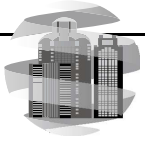
さらに、伝統産業の未来を担う若い人たちの異業種交流を積極的に進めます。前述のように堺市は、「打刃物」や「注染(浪華本染め)」「線香」といった多様な伝統産業の産地ですが、業種の垣根を越えた交流は意外に多くありません。

そこで、業界の横のつながりをつくり、それぞれの業界の自主的な新しい取組みを刺激し、堺市の伝統産業界全体の活性化を図ります。

この交流会は、業種の垣根だけでなく、職人、営業職、経営陣といった、担当業務の壁も取り払ったメンバーにより意見交換することで、所属する業界や、各々の立場の課題に気づき、またその解決に取り組むための行動につなげていきたいと考えています。

将来的にはこの交流会から、各業界の若い人たち同士が、業種の垣根を越えたコラボ商品の開発などを生み出すきっかけになれば面白いと思っています。

最後に、堺の伝統産業の情報発信拠点として、展示・体験・販売を実施している堺伝統産業会館について、「全く知らない人でもわかる、楽し



④HIBANA

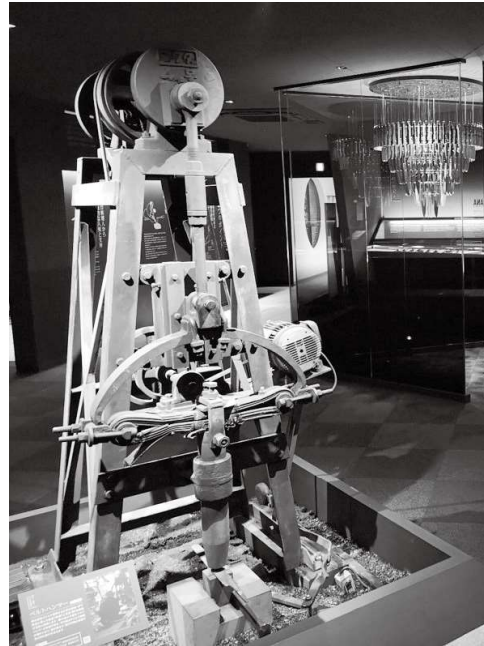
める、堺の伝統産業を身近に感じてもらう」をコンセプトに、リニューアルを進めています。

令和2年度は、同会館2階の堺刃物ミュージアムを改装しました。歴史や工程など様々な「切り口」で、堺の刃物についてわかりやすく、様々な「切る」を紹介する、という想いを込めて、「CUT」(カット)という愛称を付けました。

「CUT」では、新たなシンボルとしてシャンデリアを展示しています。「HIBANA」(火刃七)と名付けられたこのシャンデリアは、打刃物の特徴の1つである、鉄を打った際に出る火花に着目し、7段階の製造工程ごとの素材として約300本もの包丁を使用して製作しています。

さらに、昭和25年頃から使用していた鍛冶の道具であるベルトハンマーの実物を展示するなど、見応えのある展示スペースとして生まれ変わりました。

令和3年度は、線香、注染和晒等の展示スベ



⑤ベルトハンマー

ースと、伝統製品等の販売コーナーの改装を行うほか、刃物の切れ味を体験していただけるコーナーを設置する予定です。

同会館周辺には、見学や体験ができる工房を含め、たくさんの伝統産業事業所が集まっていますので、好影響を及ぼすことができるよう、業界の皆様と一体となって、堺を盛り上げていきます。

また、堺ゆかりの千利休と与謝野晶子をテーマに、堺の歴史文化を発信している施設「さい利品の杜」をはじめとした観光施設も近隣には多く所在していますので、市内の賑わい創出にも役立つものと考えています。

このように堺市では、「伝統産業のブランド力向上」をキーワードに様々な施策を展開し、最終的には、「堺でつくられている伝統製品なら、その価値と品質は間違いない」と多くの方に思っていただけのような、そんなゴールをめざしていきたいと考えています。



## 聖徳太子は いなかったか？



上野 誠

國學院大學  
文学部教授

1960年、福岡生まれ。国学院大学大学院文学研究科博士課程満期退学。  
奈良大学名誉教授。博士(文学)。國學院大學文学部教授(特別専任)。  
第15回上代文学会賞、第7回角川財団学芸賞、第68回日本エッセイスト・クラブ賞。  
著書に『古代日本の文芸空間』(雄山閣出版)、『魂の古代学——問いつづける折口信夫』(新潮選書)、  
『万葉挽歌のこころ——夢と死の古代学』(角川学芸出版)、『折口信夫的思考——越境する民俗学者——』  
(2018年、青土社)、『万葉文化論』(2018年、ミネルヴァ書房)などがある。

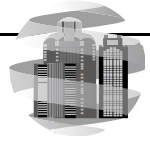
今日の聖書研究においても、イエスの奇跡をそのまま歴史的事実と受け取る研究者は、ほとんどいない。

近代的な解釈では、信仰上の伝えとして取り、その物語が示したイエスの偉大さや愛を読み取ろうとする。もちろん、宗教者にとっては、奇跡は奇跡であって、史実として考える。このあたりの議論は、コロナ禍逼塞中に読んだ鈴木大拙の諸論考から学んだことである。

じつは、釈迦の伝記も同じなのであって、それは釈迦の伝記が長く伝えられるなかで、さまざまな伝承が加わって、伝記が形成されてゆくのである。

後世に伝えられる宗教者の人格というものは、そういうものなのである。では、後世に形成されたイエス伝や釈迦伝から、歴史的事実を復元できるかというところ、私の考えでは、それも無理だと思う。私たちは、今日、歴史的事実と物語を区別しようとするけれど、そのような考え方は、近代のドイツにおいて成立した実証史学の考え方なのであって、たかだか二百年の伝統しかないものだ。史実とて、これを語ろうとすると物語となるのである。つまり、後世に残るものは物語だけなのだ。

聖徳太子伝は、すでに『日本書紀』が成立した西暦720年段階には、日本仏教の始祖としての伝記が形成されており、そのすでに形成されていた伝記を再利用、改編して、『日本書紀』の聖徳太子伝はかたちづくられていたのである。



つまり、聖徳太子伝は、『日本書紀』以前に遡るすべがないのである。その聖徳太子伝の多くは、釈迦伝を手本としているので、後世の捏造といわれるのであるが、宗教者の伝記というものは、過去にあった人物伝をもとに形成されるものだから、そうなるのは当たり前なのである。

だから、私は次のように伝える。

- 一、聖徳太子がいたか、いなかったかは、証明の方法がない。
- 二、しかし、奈良時代に、聖徳太子の存在を信じ、信仰していた人はいた。それは、歴史的事実でなくとも、信仰的眞実である。宗教にとっては、信仰的眞実こそが重要であることを忘れてはならない。

以上が、私の考え方だ。

## 奈良県における聖徳太子没後1400年に 関連した取組について

中川 裕介

奈良県文化・教育・くらし創造部  
文化資源活用課 文化資源係 係長

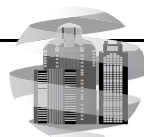
奈良県では、『古事記』完成1300年の2012年から『日本書紀』完成1300年の2020年をつなぎ、『古事記』、『日本書紀』、『万葉集』に代表される奈良県特有の歴史素材を活用した取組である「記紀・万葉プロジェクト」を9年間展開してまいりました。記紀・万葉集のゆかり地を紹介する冊子の制作、かるた大会や各種シンポジウムの開催などを通じて一般の方にはなじみの薄かった記紀・万葉集を、まずは身近に感じていただくことを主眼に取り組んでまいりました。2021年以降は、この9年間で蓄積してきた歴史文化資源活用のノウハウや情報発信ツールなどを活用し、記紀・万葉集などに記されている歴史文化の内容、その歴史の成立過程や時代背景などについて、幅広く考えて感じていただく取組も充実していきたいと考えています。

また、聖徳太子に焦点を当てた取り組みとして、奈良県の歴史上の人物を代表する聖徳太子を地域の誇りと捉え、その功績や足跡を県内外に発信していく取組も進めてまいりました。2016年度に「聖徳太子プロジェクト推進協議会」を立ち上げ、斑鳩町を始めとする聖徳太子ゆかりの市町村と連携した様々なイベントの

開催や、シンポジウムによる情報発信、各地域の聖徳太子関連の歴史文化資源の活用につながる取組を推進してきました。

今年は聖徳太子没後1400年の年に当たりますので、太子とその時代を歴史文化資源活用の主要テーマと位置づけ、日本の歴史文化と本県の深い関わりをアピールし、歴史に親しむ機運の醸成に努め、県内への誘客にもつなげてまいりたいと考えています。

この皮切りとして、先日2月28日に斑鳩町において、法隆寺古谷管長に基調講演をいただき、「聖徳太子信仰と伝承」をテーマにシンポジウムを開催しました。春から夏にかけては、奈良国立博物館と東京国立博物館で開催される「聖徳太子と法隆寺」展の開催期間に合わせ、博物館内に「聖徳太子プロジェクト推進協議会」のPRブースを設け、太子ゆかりの地域への誘客につなげたいと考えています。奈良国立博物館においては、博物館と共同で聖徳太子の生涯と功績をたどるすごろく大会(5月4日、5日)を実施したほか、協議会参画市町村の学芸員等による講演会(6月16日)を開催しました。また、8月10日に新拠点でのオープンを予定している奈良県の東京における



2012年からスタートした記紀・万葉プロジェクトのブックレット

アンテナショップ「奈良まほろば館」においては、聖徳太子ゆかりの雅楽の一端に触れるイベント(8月29日、30日)の開催を企画しています。

秋以降については、王寺町や三郷町などの聖徳太子ゆかりの市町村を会場に、リレー講座やエクスカージョンなどを通じて、聖徳太子や太子が活躍した飛鳥時代について、学んでいただく取組を予定しているほか、法隆寺の中門を舞

台として多彩な古典芸能の催しを実施するなど、これまでにない新たな企画も予定しています。また、これまでの聖徳太子没後1400年事業の締めくくりとして来年2月にフィナーレイベントを開催する予定です。

このように、本県においても多彩な催しを実施し、協議会参画市町村とも連携しながら聖徳太子没後1400年を盛り上げていきたいと考えています。

# 私たちは、歴史の続きを生きている

## ～聖徳太子1400年プロジェクト

### 八尾は聖徳太子と物部守屋～

高尾あゆみ

大阪府八尾市政策企画部  
やおプロモーション推進プロジェクトチーム 課長補佐

#### 【聖徳太子1400年プロジェクトの開始】

当市では、令和3年4月から第6次総合計画がスタートし、施策目標として歴史資産等の地域資源の活用を掲げています。

本年は、聖徳太子没後1400年にあたります。

八尾は、物部守屋の本拠地であり、崇仏派の蘇我馬子・聖徳太子の連合軍と廃仏派の物部守屋の戦いの場となり、また、聖徳太子が、四天王寺のある難波津と法隆寺のある斑鳩を往来した道があったとされ、ゆかりの場所やストーリーが多く残されています。

このため、聖徳太子と物部守屋の両方にスポットを当て、それぞれの功績や八尾の歴史資産の魅力をもつためのプロジェクトを始めました。

#### 【八尾市におけるゆかりの地】

ここで、八尾における聖徳太子と物部守屋ゆかりの場所について一例をご紹介します。

まず、上の太子「叡福寺」や中の太子「野中寺」に並び、下の太子として親しまれる「大聖勝軍寺」です。勝軍寺の縁起には、聖徳太子が物部守屋の大軍に包囲された際、大きな椋の樹



聖徳太子1400年プロジェクト

聖徳太子をイメージしたアイコンは、ヒゲと口で「八尾」を表現。アイコンと聖徳太子の文字の色は聖徳太子の装束に使われていたとされる黄丹で、太子の「太」には日の出の太陽をイメージした赤を使用。

【プロジェクトホームページ】  
<https://yao-taishi-moriya.net/>





が割れてその空洞に隠れ九死に一生を得たことから、その椽を顕彰するために創建されたとあります。本堂には、蘇我馬子、秦河勝、迹見赤檮、小野妹子を擬した四天王像が祀られています。また、平和塔では、聖徳太子孝養像と二王子立像が物部守屋像とともに安置され、「和を以って貴しとなす」という聖徳太子の理念を伝えています。

一方、守屋ゆかりの場所として、「物部守屋大連墳」があります。江戸時代につくられた『河内名所図会』には、塚に一本の松が立っている様子が描かれていますが、明治初期に、堺県知事の小河一敏が墓碑、顕彰碑、石鳥居等を整備し、その後昭和62年に石玉垣が整備されました。毎年6月には墓前祭が行われています。

### 【プロジェクトの取り組み】

さて、こうしたゆかりの場所を、歴史に興味のない方や若い方にどうすれば知っていただけるかがプロモーションの課題です。

そこでプロジェクトの第1弾として、Cinematic Vlogという手法で動画を制作し、若者への訴求を狙いながら、八尾市におけるゆかりの場所を美しく撮影することをめざしまし



第1弾動画 飛鳥×現代 ～八尾市 Cinematic Vlog～ のワンシーン



第2弾動画のメイキングショット  
市の職員も出演しています。どのシーンかわかりますか??

た。「今、私たちが立っているこの場所にも飛鳥の時代があった。私たちは歴史の続きを生きている」ことをテーマにした、飛鳥と現代のパラレル動画です。撮影は、先にあげた、大聖勝軍寺や物部守屋大連墳を含め、すべて八尾市内の聖徳太子と物部守屋にゆかりの場所で行い、見た人が「ここはどこ?」と興味をもっていただくことをねらいとしています。一説では物部氏の墓ではないかとされる愛宕塚古墳も登場し、文化財担当の職員から「どこの古墳かと思った。かっよく撮ってくれてありがとう!」と感想をいただき、作戦成功!とうれしく思いました。

そして第2弾も動画を制作しました。第1弾のCinematic Vlogは、映像とBGMのみのイメ

ージ動画であり、どの場所かわからないため、同じ場所をめぐるゆかりや歴史ストーリーを解説する内容としました。お笑いの要素も含めて、楽しく見ていただけたと思います。

また、八尾市観光協会の情報誌「新Yaomania (シンヤオマニア)」と連携し、2021年春号で聖徳太子特集を組みました。聖徳太子の一生や「へー、知らなかった！」というエピソードのほか、聖徳太子による観光振興について特集しています。次の夏号では物部守屋にスポットが当てられる予定です。

市民の方の活動では、十七条憲法から組織マネジメントやメンタルケアなどを学ぶ講座が開催されたり、河内の土のベンガラ染めで冠位十二階の色を再現するワークショップがされるなどユニークな視点で楽しまれている例もあります。

今後は、プロジェクトのホームページやSNS発信の充実、ゆかりの場所をめぐるマップやグッズの制作・活用のほか、企業との連携事業を計画しています。さらに、市民との協働企画についても力をいれていきたいと考えています。

八尾市は、高安千塚古墳群・心合寺山古墳などの古墳をはじめ、俊徳丸伝説・伊勢物語などのストーリー、能楽などの伝統芸能といった多くの歴史文化の宝庫です。こうした魅力は、市民のみならずとともに楽しみ、育てることが大切だと考えています。聖徳太子プロジェクトを通じて広域的な連携、企業との取り組み、市民協働をすすめることで、本市がめざす『共創と共生の地域づくり』を推進していきたいと思

います。

ただ、今はなによりコロナ感染拡大防止が第一となります。まずは安全な方法で地域の魅力を再発見できる工夫をしながら、繋がった人や魅力をプロジェクトの主な取り組み期間(令和3年度)終了後も継続して活かしていくことを意識して進めます。

取り組みは、プロジェクトホームページに随時まとめていますのでご覧いただきたいと思

### 【私たちは歴史の続きを生きている】

聖徳太子と物部守屋の争いは、現代まで続く日本の思想に関する問いの発端であり、また、仏教興隆のはじまりであることを考えると、私たちは遠い昔の出来事の続きを生きていることが感じられます。

歴史から何を学び、未来にどう活かすのか。

コロナ禍により一層、不確実で複雑な社会になっていますが、聖徳太子の時代も混乱の世だったと思われます。十七条憲法の教えを改めて読んでみると、1400年前と現代の課題が似通っている部分もあると感じます。太子に叱られそうですね。

プロジェクトに取り組む中で、様々な歴史解釈があることを知りました。「ああかな、こうかな」と想像することも、未来のまちを創造する力になるんだと感じています。

一方、昔と今も変わらない部分も発見できます。変わらないことの大切さや安心も未来にむけて私たちが残す大切なテーマだと感じています。



## 聖徳太子往来の道研究会について

- 目的：聖徳太子1400年を契機に、聖徳太子がヤマトと難波を往来したと伝えられる道の往来の道について研究し、顕彰普及する。
- メンバー：研究者、経済人・文化人、国、自治体、大阪商工会議所、鉄道会社などのメンバーが集う研究会
- 背景：
  - ・百舌鳥・古市古墳群の世界遺産登録は、ヤマト、河内・上町台地との関連性があり、天王寺舞楽(蘇莫者)、能(弱法師)など芸能のルーツ
  - ・我が国初の官寺・四天王寺及び歴史ある寺社集積(天王寺区は全国1の集積)
  - ・古代日本において枢要な位置にあった大阪。その歴史、とりわけ国際港として、また聖徳太子の事跡において、奈良との深い関わりを抜きに語ることはできない。2025年国際博覧会を迎える日本において、この貴重な資源を大事に磨いて育て世界に発信するべきである。
- 目標：聖徳太子を基軸に【奈良と大阪を結ぶ国際的な歴史文化観光ルートづくり】に向けて、世界に通じる物語りを創造し、研究者、大学、寺社、民間、公共機関等が連携しつつ推進する。(難波津から関西国際空港へ)
- 活動内容：資源の発掘、物語りの創造、関係者の連携など、継続的な取組みのための研究会、セミナー等の開催。
- 第1回研究会
  1. と き：2018年2月13日
  2. ところ：国土交通省近畿地方整備局
  3. 報告：渋川道の研究状況について—推古朝の大道はどこなのか— 柏原市立歴史資料館館長 安村 俊史氏
  4. 参加者：座長の小河保之氏以下10名でスタート
- 第2回研究会
  1. と き：2018年7月23日
  2. ところ：国土交通省近畿地方整備局
  3. 報告1：斑鳩町での聖徳太子関連の取組みについて 斑鳩町教育委員会生涯学習課 参事 平田 政彦氏  
報告2：三郷町における聖徳太子往還の道の取組みについて 三郷町教育委員会生涯学習課 主査 大塚 慎也氏
  4. 参加者：座長の小河保之氏以下13名参加
- セミナー
  1. と き：2019年3月25日
  2. ところ：大阪商工会議所
  3. テーマ：聖徳太子往来の道・再発見と次世代観光  
奈良県立図書館長 千田稔氏を招いてのセミナー開催
- 第3回研究会
  1. と き：2020年7月20日
  2. ところ：一般社団法人近畿建設協会 会議室
  3. 報告1：奈良県の聖徳太子に関わる地域の資源と取組みについて  
奈良県文化・教育・くらし創造部 文化資源活用課 活用推進係 係長 中川 裕介氏  
報告2：八尾市の聖徳太子に関わる地域の資源と取組みについて  
八尾市教育委員会事務局 教育総務部 文化財課長 道 齋氏／八尾市都市整備部 次長 兼 都市基盤整備課 課長 米重 豊裕氏
  4. 参加者：座長の小河保之氏以下19名参加



まち旅ツアー報告(難波津、四天王寺、亀の瀬)

**聖徳太子をめぐる 古代ローマンの旅**  
 聖徳太子往來の道 難波津から斑鳩宮(法隆寺)に向けて

聖徳太子1400年忌(2022年)  
**まち旅 第一弾! 大阪編** **現地参加無料** (謝礼あり)  
**モニター募集**

Zoom参加(無料)の方も申し込みください

聖徳太子は1400年前に大阪と奈良を愛馬【黒駒】で往来されていた。  
 その道を体験するまち旅「マイクロツーリズムの新しい古代史巡礼」  
 普段の「まち」が違って見え、新しい世界を発見するかもしれません。  
 今回は大阪府下の3つのコースを用意しました。  
 現在、新しいまち歩き観光の創出に向けて、  
 専門家や鉄道・観光関係者と研究を進めています。  
 あなたも「古代史まち旅」のコースづくりに参加しませんか?

**亀の瀬コース**  
 大和川に沿って、聖徳太子の御家伝説のある亀の瀬を  
 藤原宮跡を柏原歴史資料館長の案内で巡る

1月17日 日曜日 集合 JR河内堅上駅

---

**四天王寺コース**  
 七版で知られる縄文の崖地と  
 聖徳太子まつわる四天王寺の隠れたスポットを巡る

1月23日 土曜日 集合 あべのハルカス

---

**難波津コース**  
 1400年前の難波津はどんな景色だったのか?  
 大阪歴史博物館学芸員の深いお話と古代史にタイムスリップ

2月6日 土曜日 集合 京阪天満橋・八軒家浜

各コース共通 | 9:30集合 9:45出発 約2-2.5時間程度  
 その後ランチミーティング(お弁当1時間程度)

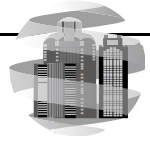
◆お申込み 応募は公式サイトから  
<https://sites.google.com/view/shotokutaishi2021>  
 主催/聖徳太子まち旅プロジェクト実行委員会  
 共催/上町台地アートプロジェクト実行委員会

各種SNSでも随時情報更新! フォローお願いします > @daichiumachi uemachi2020 uemachiartpj

※第一弾は亀の瀬、四天王寺、難波津コースを予定

聖徳太子まち旅コース 概要

コース名	①難波津2月6日(土)	②四天王寺1月23日(土)	③亀の瀬1月17日(日)
テーマ	遣隋使往来の港都と 難波宮に想いを馳せる旅	聖徳太子の四天王寺と 縄文崖地の杜を歩く旅	聖徳太子往来の道と 天王寺舞楽を憶う旅
9:30 集合	八軒家浜 ※大川眺望	ハルカス16階 ※眺望	J R河内堅上駅 ※大和側眺望
10:00 出発	OMM川岸から地上へ	ハルカスから歩道橋へ	河内堅上駅から亀の瀬へ
12:00 ゴール	上本町ユフラ前広場	J R天王寺駅	J R三郷駅
ガイド	大阪歴史博物館 村元主任学芸員	陸奥 賢 (観光家)	柏原歴史資料館 安村館長
スペシャルトーク	大阪市文化財協会 学芸員 積山 洋	四天王寺 執事 山岡 武明	四天王寺大学人文社会学部教授 南谷 美保
復元画像(試作)	難波津と隋使対応の情景画像	四天王寺からの古代海岸の 風景画像	聖徳太子、笛演奏の場
休憩・食文化	昆布 煎茶	和菓子天王寺蕪 天水酒	河内ワインカステラ
気 候	好天	雨	晴れ

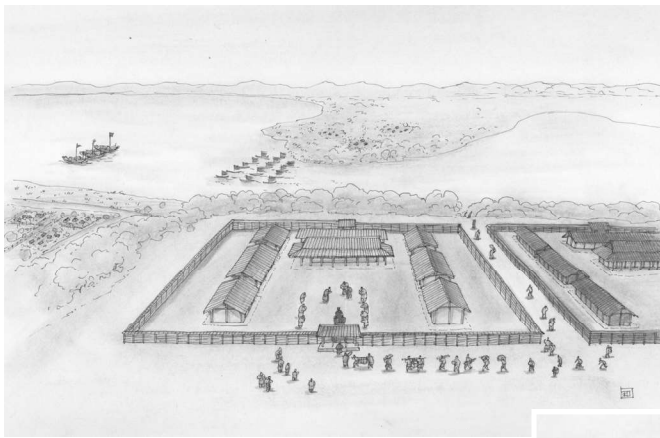


## 古代復元画

聖徳太子往来の道の主なスポットは、重要な歴史的故事の現場ですが、現在そこに訪れても1400年前の風景を感じることは困難です。

そこで、古代歴史復元画家として知られる早川和子先生に3つの地点の想像図を描いて頂きました。

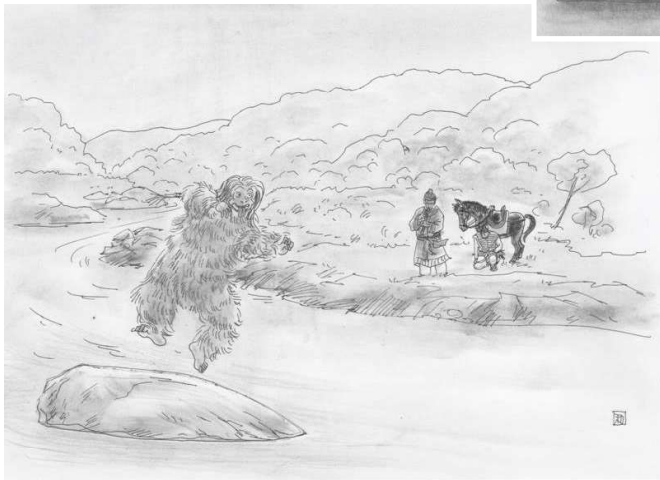
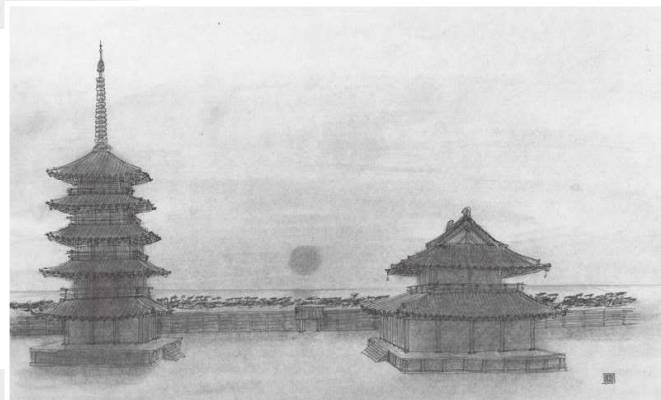
古代史の専門家にもアドバイスを頂きましたが、あくまでこれは想像図であり、考古学的な根拠に基づくものではありません。



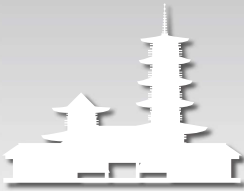
608年難波津(第1次説) 隋使応接の迎賓館の新館。

右は高麗館、現在の大川(難波の堀江) 左(西)には難波津、大川の河口から瀬戸内海、大陸(隋)に続く海上ルート。

1400年前の四天王寺  
西方の海に沈む夕日。浜側は木津、北に難波津、南に住吉大社が並ぶ。



1400年前  
聖徳太子が斑鳩から難波に愛馬黒駒で通われ、亀の瀬で笛を吹くと山の神が猿に身をやつして踊った。  
という謂れが天王寺舞楽の【蘇莫者】の舞として現在に受け継がれている。



上町台地の歴史と美を巡る知の再発見 シリーズ講座

第3回 @てらまち 芸術さろん

開催日時：2020年12月10日(木) 午後6時～午後8時  
会場：和宗総本山 四天王寺 本坊 五智光院・登録者にはZoom配信  
テーマ：上町台地の「坂」を巡るミステリー –作家と地質学者の対話–  
主催：上町台地アートプロジェクト実行委員会  
共催：和宗総本山 四天王寺・(一財)大阪地域振興調査会  
協力：大阪ガス株式会社・近鉄グループホールディングス株式会社  
サントリーホールディングス株式会社



プログラム

開 会

◎本講座の説明

講 演

◎ゲストのお話 1

『幻坂』と七坂の魅力  
–坂と夕陽庵の迷路性–

講師：有栖川有栖  
(作家)

◎ゲストのお話 2

大阪平野の坂はどのように  
できたのか  
–上町台地の坂を中心に–

講師：中条 武司  
(大阪市立自然史博物館 主任学芸員  
大阪の地形・坂、地質の研究者)

座 論

◎参加者を交えたフリートーク

ファシリテータ：吉野国夫 一般財団法人大阪地域振興調査会 常務理事

閉会挨拶

吉田 明良 和宗総本山四天王寺 執事総務部長  
白川 正彰 近鉄グループホールディングス株式会社 取締役専務執行委員



七坂と芭蕉、  
家隆に  
想いを馳せて



有栖川有栖  
作家

■ 上から降ってきた声と大阪の女性性

『幻坂』は七坂の短編に『枯れ野』『夕陽庵』を加えた全9編の短編集です。この執筆中に、声降ってきた、のです。本当に聞こえるわけではありませんが、上町台地、特にこの七坂界隈を歩いている時にだけ感じたのです。ほとんど聞こえないような細い声。ただ一つ言えるのは女性の声だということ。私のイメージする大阪は完全に女性、です。あのかすかな声が『幻坂』を書く導きの灯火になってくれた気がします。地霊、あるいは大阪のDNA。そんな見えない力があると思っています。

大阪でしか書けない  
上町台地の怪談



ミステリアスな学園坂

市民と調べた  
大阪の「坂」



中条武司  
大阪市立自然史  
博物館 主任学芸員  
大阪の地形・坂、  
地質の研究者

■ 上町台地の断層と海食岸

上町台地の成り立ちの話をしましたが、実は平野の成り立ちがここまでわかっている土地は大阪くらいです。

なぜかという、大阪には考古学や歴史学の分野の人たちと地質学や地形学の分野の人たちが密接に連携して研究するという機運が昔からあったからです。

今でいうところの学際的、あるいは文理融合。この辺りをもっとアピールしていければと思っています。

12万年前、上町台地は  
海の下だった



通天閣から見た波食崖の縁

# ■ 古代史観光の未来展望 ■

## —古代のスーパースターをたどるマイクロツアーリズム—

◆日時 2021年3月17日(水) 13:15～17:00  
◆場所 あべのハルカス25階会議室、リモート配信(Zoom) 同時開催

※組織名・肩書きは当時のもの。

### 第1部 創作講談

#### 【隋使来港をめぐる聖徳太子・幻想】

旭堂南佐衛門(上方講談協会会長)  
作：中野順哉

序) 難波津に 咲くやこの花 冬ごもり

今は貼るべど 咲くやこの花

難波津周辺に、倉庫やものづくりの工房が集まっている。難波宮の時代に向けて、ますます発展する港と街の鼓動。

#### ■ 難波津の段

- ・ 古代難波津にて隋の使節団を迎える。
- ・ 準備の整った迎賓館に、怪しい男の姿。官吏は男を追い出そうとするが、男は「用事が済めば出てゆく」と言って姿を消した。
- ・ 翌日、外交官として聖徳太子は裴世清との謁見の儀式を終え、その後に宴がはじまる。
- ・ その中で太子は裴世清に「明日、面白いものを見せよう」と言う。

#### ■ 四天王寺の段

- ・ 翌日、太子は裴世清一団を伴って、四天王寺に向かった。
- ・ 寺で裴世清が見たものは、四天王像を本尊とする寺の存在。
- ・ しかも四天王像はすべて西を向いている。



旭堂南佐衛門

- ・ 太子は、裴世清に日本人独特の精神性・想像力をみせつける。

#### ■ 亀の瀬の段

- ・ 謁見のプログラムを終えて、太子は斑鳩に。
- ・ 大和川の難所・亀の瀬の水かさが減るのを待っていると、目の前に一人の老人が姿を現した。
- ・ それは難波宮で姿を消した老人であった。
- ・ 老人は聖徳太子に言った「お前のやったことはイタチごっこに過ぎない」と。
- ・ その意味を舞で伝える。
- ・ 太子は大いに感じるどころがあり、一人涙を流す。

#### ■ 終

遠くで街の鼓動がする。鼓動に合わせて、感じるしかない舞を見る。

見ることで許される己の存在意義をかみしめる。気が付くと——暗くなった空に、満月が出ていた。

## 第2部 古代まち旅フォーラム マイクロツーリズムと新しい巡礼の 道の創造

○ ショートスピーチ: 飛田 章(観光庁観光資源課長)  
(リモート)(一部抜粋)

関係の皆さまのご努力に敬意を表しますとともに、心より喜びを申し上げます。新年度の施策の方向性として大きく5本の柱があります。

- ①感染拡大防止策の徹底とGo Toトラベル事業の延長。
- ②観光施設、宿泊施設などを核とした地域の再生を短期集中的にすすめる。
- ③観光資源をしっかりと磨き上げていくという意味で、滞在コンテンツの充実
- ④外国のお客さんにストレスフリーで旅行していただくための受け入れ環境の整備。
- ⑤感染状況を見極めたうえでのインバウンドの段階的復活。

今回のシンポジウムを通じて関係者の方々が様々な気づきや知見を得られ、日本遺産や地域の素晴らしい資源の一層の観光活用に向けての取り組みの進展がさらに図られることを期待しております。

### 講演1「アジアの中の難波

—聖徳太子の時代—(一部抜粋)

河上麻由子(奈良女子大学文学部 准教授)

大業3年、倭国王の多利思比孤が使者を派遣して朝貢してきた。使者が言うことには、海の西には菩薩天子がいて重ねて仏法を興している。そこで倭王は、使者を派遣し、菩薩天子にまみえて拝礼させ、さらには沙門、数十人の僧を使わせて仏教を学ばせたいと申しています。

その国の書状に、いうことには「日出ずる処の天子」、先ほど紹介した戦前の見解あるいは教科書、私が読



み上げた使者の発言を無視しています。全く分析の対象になっていませんでした。ところが、使者の発言を読む限り、倭国は対等を思考してはいない。拝礼に行っている。隋の皇帝のことを菩薩のように素晴らしい天子だ。しかも仏法を重ねて興している。このように称賛しています。そこで、戦後の教育と研究においては、このような理解がされています。……………

……ここで皆さんに伺いたい。仏教とは何か。

先ほどの講談の中では、仏教の神髄、信仰としての仏教が出てきました。慈愛である。仏教とは何か。まず出てくるのは宗教です。当然、宗教です。宗教ですと学生は言いたい。もちろん前近代のアジアにおいて最も広範に受容された宗教として仏教はとらえられます。現在はイスラム化した東南アジアの諸国についても本来は仏教を受容していた国が多くありました。

そう言われて皆さんが思い浮かぶのは、例えばインドネシアのボロブドゥールです。しかしながら、仏教と呼ばれるもの、単なる宗教では存在しえなかった。なぜならば、出家者たちは自分で生産活動を行うことは禁止されています。彼らが生きていこうとすれば、また、自らの信仰を他者に伝えていこうとすれば、彼らを支える権力者たちと手を組むしかない。

ですから、仏教は当初から権力者と密接な関係を結んできました。権力者と密接な関係を結び続けるには、権力者にとって有利な行動も行わなくてはなりません。そこで、僧侶が外交の使者になったり、外交意思を伝えたり、交流の使者になったり、文化交流の使者になったり、友好の使者になったりということが、アジアの仏教史の中で長く長く行われてきました。仏教は宗教というだけでは足りない。

**講演2「聖徳太子巡礼の道観光の可能性」(一部抜粋)**

**宗田 好史**(京都府立大学教授 イコモス日本委員会)

……………まさに大阪こそ、上町台地こそ語るべき隠された歴史があり、ペトロの墓を発見したような、ワクワクすることがこれから続いてくる。咲くやこの花、美しい海と空と梅の花を見た瞬間に、歴史を語るとはこういうことか。そこから物語を生み出し、物語に沿った観光がしたい。まちを歩きたいという気持ちが生まれるのです。

東アジアと日本がどう結びついていくかというときに、上町台地から斑鳩にかけて、かつてあった聖徳太子の道、あるいは竹内街道、あるいは百舌鳥古市を結ぶ古墳の道がある。

大阪のまちは歴史的にも渡来人、在日の方たちの歴史があります。これからますます集まっ

てくるインバウンドの方たち、特に東アジア、東南アジアの方が多地域になる。大阪が日本有数の歴史



宗田 好史

文化都市として発展していくことが日本人の未来にとって非常に重要になる。それが大阪の文化的価値である。観光を考えるときに、文化を考えるときに、大阪の本来のあり方をこれからも次々と発掘していく。そういう取り組みをしなくてはならない。

**【分科会】**

**第1分科会**

**「古代史観光のコンテンツをみかく」**

**座長**：大澤 研一(大阪歴史博物館 館長)

**報告者**： 柏原市立歴史資料館 館長 安村 俊史  
 大阪歴史博物館 主任学芸員 村元 健一  
 四天王寺大学人文社会学部教授 南谷 美保  
 浪速魚菜の会 代表理事 笹井 良隆

**参加者**：奈良女子大学文学部 准教授 河上麻由子  
 近畿地方整備局 企画部事業調整官 寒川 雄作  
 (公社)2025年日本国際博覧会協会 秘書室参事 勝見 友一  
 大阪市都市整備局長 篠原 祥

大阪府 住宅まちづくり部 まちづくり戦略室都市空間創造課課長補佐 石井 敬任  
 八尾市教育委員会事務局 教育総務部文化財課長 みなもと 洸 斎

(公財)大阪観光局 MICE統括官 田中 嘉一  
 (一社)関西経済同友会 企画調査部主任 東野 訓子  
 大阪商工会議所 理事・地域振興部長 中野 亮一  
 (一社)関西イノベーションセンター 楠田 武大

NPO法人斑鳩文化協議会 理事長 阪口 博明  
 サントリーホールディングス(株) 大阪秘書室秘書役 山本 卓彦  
 滋慶学園COMグループ OCA大阪デザイン&IT専門学校  
 エンタテインメントコンテンツ科学科長 松浦 誉宏

近鉄不動産(株) 事業開発本部プロジェクト企画部長 中井 公一  
 大阪信用金庫 常務理事 清水 明彦  
 株式会社ジーンBEM事業部APP開発部 部長 曾根 俊則

凸版印刷 関西ビジネスイノベーションセンター 部長 関田 雅光

ファシリテーター： (一財)大阪地域振興調査会 常務理事 吉野 国夫



第1分科会

## 第2分科会

「マイクロツーリズムでつながる巡礼の道」

座長：宗田好史

報告者：大阪市立大学大学院文学研究科文化構想学専攻文化資源学 准教授

天野 景太

株式会社JTB 法人事業本部 地域交流事業推進担当部長 石村 英之

観光家/コモンズ・デザイナー/社会実験者 陸奥 賢

まいまい京都 代表 以倉 敬之

参加者：国土交通省近畿地方整備局 大和川河川事務所 副所長 榎本 博行

三郷町教育委員会事務局 生涯学習課 主査 大塚 慎也

大阪市経済戦略局 観光部長 花澤 隆博

奈良県地域振興部 文化資源活用課 紀万葉プロジェクト推進係 係長 中川 裕介

八尾市政策企画部やおブローモーション推進プロジェクトチーム 課長補佐 高尾あゆみ

天王寺区役所 市民協働課 シティ・プロモーション室 室長課長代理 東浦 圭司

西日本旅客鉄道株式会社 大阪支社 副支社長 宮本 芳明 (Zoom参加)

近鉄グループホールディングス株式会社 総合企画部 課長 吉野 将弘 (代理：立森)

京阪ホールディングス株式会社 経営企画室 事業推進担当部長 南谷 雅和

(公財)大阪観光局 常務理事 芳田 隆



第2分科会

(一社)近畿建設協会 理事 谷本 光司

天王寺観光ボランティアガイド協会 会長 八木 進 (急遽ご欠席)

大阪あそび認定ガイド・大阪くらしの今昔館 町家 酒井 裕一

ファシリテーター：心学明誠舎 理事

(一財)大阪地域振興調査会 評議員 宇澤 俊記

コーディネーター： ㈱タン計画研究所 代表取締役 宮尾 展子

### パネルディスカッション(一部抜粋)

第1分科会 大澤：……………味付けという大変ですが、史実は料理の素材だと思います。素材の味を大切に料理の世界ではよく言われます。それに例えるのが正しいかどうかはわかりませんが、歴史の場合は、まずは事実をしっかりと押さえ、そのうえで味付けをしていく。そういうスタンスが重要ではないかとおもいます。

大阪は歴史が重層的に重なっているのです。その重層性をうまく生かしていくのが、大阪で歴史を広めていくときに有利な条件なのかと、あらためて感じました。

第2分科会 宗田：……………近代日本が必要とした聖徳太子の物語から脱却して、令和の聖徳太子の物語をどう描くか。一人ひとりの意識の中に閉じ込められていて、今まで聞かされていた話をもとに物語を書こうとしているが、そうではなく、もっと自由に想像力を発揮して、新しい聖徳太子像を軸にもっと面白い話をつくっていく可能性があるかもしれません。

それは一人旅をする人が発明するものかもしれない。ガイドしているお客さんがステキと言ったことを積み重ねていくと新たな発見があり、新たな物語が生まれるかもしれない。

スペシャルアドバイザー 福島：……………来



るべきインバウンド  
回復の時期と、2025  
年の万博を見据え、  
……………難波、大阪城、  
USJ、海遊館、たこ焼  
き、お好み焼き、これ  
が定番でした。これも  
結構だと思いますが、



スペシャルアドバイザー  
福島 伸一  
(株大阪国際会議場 社長)

それに加えて大阪の歴史文化、食の都大阪、水  
の都大阪などのリブランディングに取り組んで  
いく必要があると思っています。

とりわけ歴史文化については、大阪の人も、  
日本人も、海外の人も、大阪には歴史がない、  
文化はないと誤解している。思われている。そ  
ういうきらいがないわけでもない。特に、古代  
史にスポットライトを当て、深掘りして観光の  
キラコンテツに育て上げる。なぜかという  
と、一般的な歴史文化では他の地域との差別化  
は難しい。手始めに聖徳太子を切り口にして、  
奈良も入りますが、大阪でしか語れない物語が  
あるのではないかと思います。

南谷：……………物語性というキーワードが何度  
も繰り返され、未来につなぐという言葉も出てき  
たと思います。個人的には、そこに「自分事」と  
いう言葉を付け加えてはどうかと思います。正確  
性が話題になり、片や、面白おかしなコンテツ



パネルディスカッション

も必要だという議論がある中で、中間に「自分事」、  
実際に観光に行ったりコンテツを見たりしたと  
きに、それを今の自分とつないで考えることがで  
きる要素があれば、どちらにぶれても許される  
のではと、お話を聞いていて思いました。例えば、  
今日は雅楽の話はできなかったのですが、私がど  
ういう研究をしているかという、雅楽の演奏者  
が残した記録を読んで、彼らはどうやって日々の  
稼ぎを得ていたのか。そういうことが専門です  
ので、私と同じ苦勞をしていると自分事として資料  
を読んでいくという目線が身につきます。歴史的  
コンテツを楽しむことについての新しい視点、  
そこに「自分事」というキーワードを提案します。  
天野：……………古代史、太子の1400年というき  
っかけの一つが神聖なるもの。聖なるものは、も  
ともとは日常と近い関係にあったわけです。信仰  
も遠のき、お墓も地方にあって、家族はバラバラ  
という状況の中で、都市の中で失われつつある。  
それを取り戻すというのは違うかもしれませんが、  
日常から外れた、反日常的な試みの中で、古代史  
を媒介として聖なるもの、神聖なるものに触れる。  
そういうきっかけづくりが、古代史観光の可能性  
としてはあり得るのではないかと。

司 会：本日は長時間ありがとうございます。  
大変充実した議論ができ、大きな取り組み方向  
が見えたように思えます。皆様方と一緒に本  
事業を進めていきたいと思っておりますので、今後と  
もよろしくお願ひいたします。

閉会挨拶：小河 保之

(元大阪府副知事 聖徳太子まち旅プロジェクト企画会議座長)

(省略)

# 若者にとっての「和風」

高田 光雄

京都美術工芸大学教授  
京都大学名誉教授  
(一財)大阪地域振興調査会 理事

私は、長年大学で建築学の教育・研究に携わっているが、近年、「和風」建築に関心を持つ若者が多数現れている事に強い興味を覚えている。「和風」という概念は、明治期、「洋風」に対峙する概念として生まれ、第二次世界大戦後に広く一般化したと言われている。しかし、現代においては、むしろ、グローバリゼーションの進み中で、日本という地域に根ざした文化を想起させる諸物を形容する概念として使われているようにも思われる。その使われ方は、表層的と感じることもないではないが、時には、人間の生活環境やものづくりの本質に関わる深い意味合いを含むこともある。以下では、今年、私の大学を卒業したアルゼンチンからやって来た留学生が「和風」をテーマとして取り組んだ卒業制作の概要を紹介し、現代の若者にとっての「和風」の意味を探ってみたい。

この留学生は、卒業制作のテーマを探る中で、日系3世である自身のルーツを確認しながら「和風建築とは何か」という大問題に正面から向き合うことを決意した。先ず、磯崎新らの建築家、西和夫らの建築史家、加藤周一らの評論家などが論じてきた和風建築に関わる多様な言説を丁寧に読み解き、柱梁構造、外部と内部

の関係、モジュール、中間領域、奥行き感、部分主義、非相称性、和小屋、屋根形状といった和風建築の9要素を抽出した。次に、桂離宮などの日本の伝統建築や安藤忠雄、谷口吉生、隈研吾などの現代日本の建築家による作品がそれらの要素をどの程度含んでいるのかを検証した。さらに、それら一つ一つの意味を深く考察する中で、各要素の数だけでなく、要素間の関係にこそ和風建築のより深い特質があることを発見し、「gradation」と「balance」をデザインコンセプトとして制作を進めた。その結果、「開きつつ閉じる」、「閉じつつ開く」ための引き戸を多用した入れ子構造の空間を重ね、あえて純和風建築を目指すのではなく、彼女が定義するところの、50%前後の和風要素を備えた「contemporary wafu」の条件を備えたクリエイターのためのシェアオフィスという意欲的な作品を作り上げた。敷地は、伝統産業に関わるさまざまな職人とアーティストとのコラボレーションの推進を目的として、一見オフィスの敷地としては考えにくい京都市東山区の五条坂下に定めている。眺望に配慮したワークスペースとともに、小上がりになった中間領域、さまざまな大きさのアルコーブの設定などの内部の設え

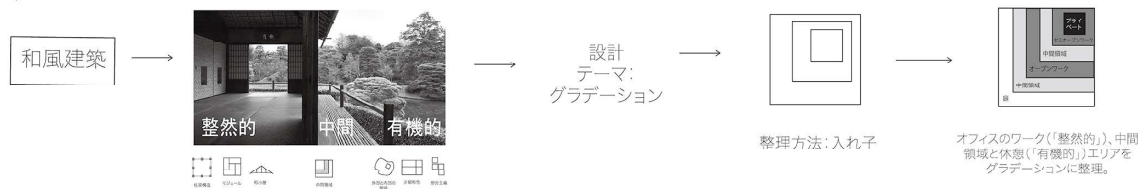
にも和風概念の展開が読み取れる。

この作品に見られるように、若者にとっての「和風」は、決して古いものでも懐かしいものでもない。それは、地域に根ざした文化の意義や重みを理解した上で現代の豊かな環境を作り出すためのデザインの重要な選択肢なのである。

もう少し年齢を重ねたわれわれは、さまざまな柵のなかで生まれた「和風」の固定観念から早く解放されなければならない。「和風」に真面目に取り組む現代の若者たちから学ぶべきものは決して少なくないのである。



テーマ：



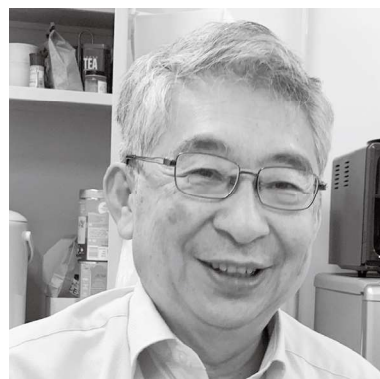
山尾 アナベル エリカ

「Gradation」和風スタジオ—和風建築の基本的な特性を活かしたシェアオフィス— 2020年度京都美術工芸大学卒業設計(最優秀賞・理事長賞受賞)

# 「関西のインフラ強化を進める会」 第9回シンポジウム 開催報告(事務局)

## 小林 潔司

京都大学経営管理大学院特任教授  
(一財)大阪地域振興調査会 顧問



先般、7月6日(火)にメルパルクホール大阪  
で表記シンポジウムが開催された。

テーマは

「関西再生のためのインフラ整備構想について  
～2025 大阪・関西万博、スーパー・メガ  
リージョン形成後を見据えて～」

である。インフラ投資の首都圏一極集中に伴う弊害を是正し、関西主導による日本経済の再生及び強靱な国土造りの推進をうたっている。井上信治(国際博覧会担当大臣、内閣府特命担当大臣)の講演、吉津洋一(一社・建設コンサルタンツ協会近畿支部長)のプレゼンテーションでは、森之宮地区に「万博レガシー・シンボルゾーン」を置き、主都代替機能整備構想ミラーリングKANSAIとして「立法・行政・司法拠点」を誘致しようとの大胆な提案があった。パネルディスカッションでは弊会顧問の小林潔司先生がコーディネータを務められ、関西経済3団体から以下の各氏がパネラーとなって、それぞれの立場から報告された。

関西経済連合会 副会長 村尾 和俊氏

(西日本電信電話 相談役)

大阪商工会議所 副会頭 東 和浩氏

(株式会社りそな銀行 取締役会長)

関西経済同友会 幹事・2020年度KANSAI

未来都市委員会委員長代行 吉野 国夫氏

最後に小林先生は、大阪・関西が人間を主軸に置いた世界のネットワーク拠点になるべきだ。との見解を述べられた。小林先生はかねてより、ABL(アジアビジネスリーダー人材育成プロジェクト)を主宰されており、米国に後れを取るわが国の人的ネットワークの強化こそが世界で生き延びる唯一の道だとの持論がもとになっていると拝察した次第である。

文責：事務局

# 和室展覧会inベルリン

## ～ UTSUWA (器) プロジェクト@Berlin ～

内田利恵子

@ベルリン事務所  
建築設計室Morizoー 主宰

半年ぶりに戻ったBerlin。ドイツの若手建築家と共に展覧会を開催した。

昨年ハンブルクで行った和室模型展のアップデート版をやろうと彼らと話したのは帰国直前の12月。帰国後も週一ペースでミーティングを重ね、毎年各地で開催される市民に開かれた建築イベント「Tag der Architektur」(建築の日)にエントリーした。建築設計事務所NOKUと共同で開催することができた2日間のプログラムは盛りだくさんで、1時間刻みに和室講座やワークショップを開催し沢山の人の関心を持って

もらうことが出来た。

1つ目は和室模型展示と和室講座。コンセプトやデザインの違う8種類の和室模型を展示し好きか嫌いかを赤青シールでジャッジしてもらう。意外にも主旨説明をしっかりと読み、模型をじっくり観察して、沢山の人が【和室リサーチ】に参加してくれた。異国の人たちの和室趣向がある意味よくわかり興味深い。

和室講座は4つのテーマに絞り1時間毎に開催。私のたどたどしいドイツ語にもかかわらず、真剣に和室について知ろうと耳を傾ける来場者。



和室講座を熱心に聞く来場者

質問や意見も飛び交い15分のコースはいつの間にか1時間コースへ。日本や和室への関心の深さに驚きつつも、まだまだ情報を得る機会が少ないことを実感。いろいろな可能性を感じる機会にもなった。和室講座は今後も続けていきたいプログラムだ。

2つ目は職人ワークショップとして、日独の木工職人が講師となり、来場者が日本の鋸を使って木の薄切り対決をするというもの。日本とベルリンの会場をZoomで繋ぎ“引いて切る”日本の鋸の使い方をレクチャー。初めて触る日本の鋸でコンマ数ミリを競い、優勝者には表彰状が授与された。

今回は日本の道具、特に鋸の産地である三木(兵庫県)のメーカー2社の上質手仕上げ鋸を数種とドイツのホームセンターなどでも流通し始めている使い捨て刃鋸を持参し、ワークショップを行った。展覧会后、これらの鋸は昨年出会



2020年に制作したUTSUWAプロトタイプ01

ったベルリンでも指折りの木工職人さんに預けたが、彼から長い間使ってきた日本の鋸を目立って修理してきてほしいと。これは以前より「欧州チャレンジ」の一つだった“日独職人Meets”実施の一步、道具を介した日独ネットワークへとなる。メーカーと連絡を取り持ち帰った。

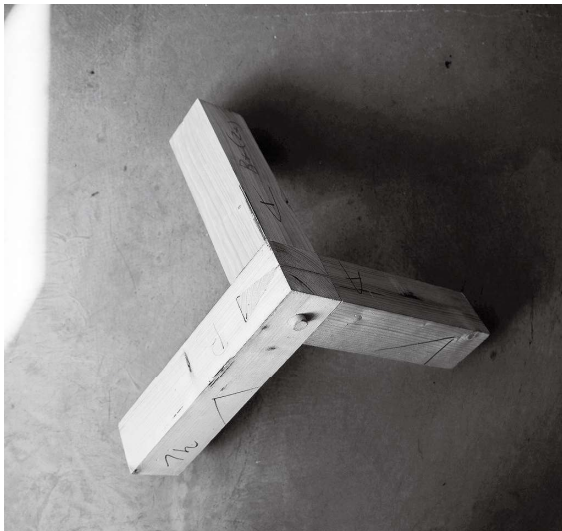
職人ワークショップとしてはこの他にも、日独職人道具箱拝見として、互いの手仕事道具をお披露目。繊細さとダイナミックさの差が印象的な日独相互の道具。珍しいアンティーク道具などもあり職人同士の興味も深まった。こうした小さなことが人や技術を繋ぎ拡がっていくきっかけとなることを願う。

そして、3つ目は一番の難関。UTSUWAプロジェクトのお披露目。これは2年間のドイツ滞在で1番奮闘したプロジェクトのメンバー結成からプロトタイプ制作までをリアルで発表することが出来た喜びの企画でもあった。NOKUの2人はこのUTSUWAを会場に設置すること



プログラムの最後にした小さなお茶会

を強く望んだ。ありがたい提案だが個人的にはかなりのプレッシャーがあった。離れた日本からこのBerlin生まれの小さな和室(器)を解体・運搬・設営するメンバーを平日に招集するのは困難だ。案の定、UTSUWAメンバーは仕事や休暇でベルリンを離れていて、集まったのは私を含め3人。にもかかわらず、制作リーダーの職人Justsuの活躍で何と解体に要した時間は20～30分。設営にはNOKUの2人も加わり



UTSUWA01プロトタイプの仕事口モックアップ

工具も使わず5人で1時間足らずで完成。前日までの大心配は何だったんだと思える結果ですんなり設営できてしまった。半年ぶりにコロナ規制が緩和されやっと日の目を見た私たちのUTSUWA。関わるメンバーや見聞きする人はもうこの箱を「UTSUWA」と抵抗なく呼び始めている。プロジェクト結成から1年。この先の発展が楽しみだ。

兎に角、再渡独1週間で開催したこの展覧会では多くの刺激と学びがあり今後の妄想も膨らむばかり。少しずつアクションを積み重ねて2年半のネットワークをこれからも深め広げていきたいと思う。

UTSUWA01プロトタイプの仕事口モックアップ(左写真)に注目してほしい。仕口(ドイツ語でverbindung=接続、連結、連携などの意味がある)はUTSUWAメンバーや日独職人交流の象徴で、まさに大切な“継ぎ手“だと感じた。

建築設計室Morizo- 主宰 内田利恵子@ベルリン&大阪事務所  
【器プロジェクト】 <http://morizo-archi.com/utsuwa-project-start.htm>



# ショッピングタウン研究会活動報告

藤岡 里圭

関西大学商学部教授・(一財)大阪地域振興調査会理事

2020年度ショッピングタウン研究会は新型コロナウイルス感染症が拡大したことにより  
予定通りの開催が困難となり、第196回のみ開催となった。

## ■第196回

開催日：2020年12月14日(月) 場所：(一財)大阪地域振興調査会 安堂寺分室  
講師：株式会社ディンプル 営業本部西日本営業部部长 堀野真臣氏  
株式会社ディンプル 営業本部長スタッフ 郡田徹士氏  
テーマ：JFRグループの人事戦略とグループ総合人材サービス「ディンプル」の企業戦略について

株式会社ディンプルは、1991年、大丸に販売員を派遣するための人材派遣会社として設立され、2008年には、松坂屋の人材派遣会社であったエムスタイルと経営統合した。JFRグループの店舗を中心に人材の派遣や紹介事業、また、商業集積のインフォメーション業務等の委託事業や、人材の育成を担う教育研修事業を行うことで発展してきた企業である。

新型コロナウイルス感染症が拡大したことによって、人材派遣業界においてもいくつかの変化が見られるようになった。第一に、感染症の拡大とともに有効求人倍率が低くなり、それに伴い経験者を求める求人が増加したということ。第二に、感染症が拡大する前は自社の求人だけでは応募が少なく他社にも依頼せざるを得なかった求人が、自社のみで完結できるようになったこと。第三に、コールセンターの求人や、物流センターで商品をピックアップする作業の求人が増加していること、第四に、百貨店の売上高が減少していることから、百貨店関連の求人が減少していること。そして、第五に、ZOOM等を活用した遠隔対応が進んでいるこ

とが挙げられるという。

新型コロナウイルス感染症拡大による休業は、派遣会社が派遣労働者の休業補償を負担しなければならず、厳しい状況が続いている。しかも、小売業が大きく変化していることは、人材派遣業界にも影響すると考えられる。たとえば、インフォメーション業務の無人化や機械化が進み、売場運営の業務委託も進んでいる。このような最新の事情を講師から紹介された後、参加者で小売業の競争力はどのように構築されるのか、また、販売員の経験はどのように蓄積され店舗の競争力となるのかといったことについて議論した。

## ○2020年度研究会メンバー (所属は同年4月)

芦田 英機(豊中駅前まちづくり会社)  
石原 武政(大阪地域振興調査会) [主査]  
上野 正哉(京阪電気鉄道株)  
郡田 徹士(株ディンプル)  
佐藤 善信(関西学院大学)  
沢田 集(阪急阪神不動産株)  
角谷 嘉則(桃山学院大学)  
堤 成光(2025年日本国際博覧会協会) [幹事]  
藤岡 郁(NPO法人社叢学会)  
藤岡 里圭(関西大学) [幹事]  
舟本 恵(JR西日本SC開発株式会社)  
山納 洋(大阪ガス株)  
吉野 国夫(株ダン計画研究所)



## 2025年に向けたスマートシティ化の加速

—スーパーシティ・スマートシニアライフ—

吉田 真治

(大阪府スマートシティ戦略部スマートシティ推進監)

コロナ禍もあって、櫟友会もなかなか開催できず、みなさんにご一緒できないまま1年以上が経ってしまいました…膝をつきあわせ大阪・関西の元気に向け、熱く議論する櫟友会。この貴重な場がなかなかもてないというのは、大変残念です。ここにきて、ワクチン接種もすすみつつあり、アフターコロナに向けた動きもあちこちではじめています。僕自身も、そろそろアフターコロナ、そして大阪・関西万博が開催される2025年、団塊の世代が75歳以上となられる2025年に向けての準備を本格化させるため、みなさまにご一緒させていただく機会、待ち望んでいます。

でも2025年に向けて残された時間は刻々となくなっていった今日この頃、待てるだけというのはもちろんありえないですね。僕が現在所属しています、大阪府スマートシティ戦略部でも、昨年立ち上げた370の企業・団体・市町村に加入いただいている大阪パートナーズフォーラムなどを通じて、企業や経済団体のみなさん、市町村のみなさんなどと一緒に、トライ&エラーも重ねながら、2025年に向けた準備を、とにかく急いで進めています。そのなかでも、いまこの時点で、もっとも力を入れてますが、未来社会実現のモデルとなる「スーパーシティ」と「スマートシニアライフ事業」です。

スーパーシティは、2030年の未来社会を、最先端のICT技術と大胆な規制緩和を通じて、早期に実現するため、2019年に国が創設した制度。大阪府市は今、大阪での区域指定を獲得すべく、手をあげているものです。提案では、うめきた2期、そして夢洲地区という、住民が居住しないグリーンフィールドを対象エリアとし、そこで万博を契機に、医療の国際化、空飛ぶ車の実現などの未来事業をスタートさせ、大阪の魅力として確立していこうとしています。この夏には第一次選定がなされる予定ですので、オール大阪の総力をあげて、スーパーシティの区域指定の獲得にむけ、がんばります。

もう一つのスマートシニアライフは今後さらに増加する高齢者のみなさんのQOL向上のための事業です。今や健康寿命を伸ばすには治療よりも生活の質の向上の方が貢献度が高いと研究でも言われてるそうです。スマートシニアライフというのは、ICTを活用して、府域の高齢者の生活の質の向上に貢献することをめざしています。高齢者はいろんな悩みを持っておられます。そうした悩みに応えるサービス、例えば買い物代


「健康といのち」をテーマに住民QoLを向上させる先端的サービスを展開  
 ～2つのグリーンフィールドで3つのプロジェクトを展開、大阪全体のブラウンフィールドへ～

**『データで広げる“健康といのち”』がテーマ**

**2023年～**

**【夢洲コンストラクション】**

- ① 建設工事現場内外の移動、
- ② 建設工事及び資材運搬、
- ③ 建設作業員の安全・健康管理の3つの円滑化を推進



**2024年～**

**【うめきた2期】**

(中核機能のテーマ)  
ライフデザイン・イノベーション

超スマート社会が到来する中、IoTやビッグデータ等の活用により、創薬や医療機器開発などの分野にとどまらず、人々が健康で豊かに生きるための新しい製品・サービスを創出



**2025年**

**【大阪・関西万博】**

(テーマ) いのち輝く未来社会のデザイン

(サブテーマ) 『Saving Lives (いのちを救う)』  
 『Empowering Lives (いのちに力を与える)』  
 『Connecting Lives (いのちをつなぐ)』



**スーパーシティと万博レガシーを展開**

大阪全体・  
全国への波及

めざすは府民・市民のQoLの向上  
「健康寿命の延伸」へ

輝く未来社会  
スーパーシティと  
万博レガシーを  
880万府民につなぐ



2つのグリーンフィールド  
(夢洲、うめきた2期)

行やオンデマンドバスの予約、コミュニティへの参加促進などを、大阪府と民間企業のみならず、民間企業が組んでオールインワンで提供していきます。高齢者に使いやすい工夫をしたアプリを専用のポータルサイトから提供していきこうということで準備を進めています。2025年までには100万人の高齢者にこのサービスを展開していくというのが目標です。

スーパーシティ、スマートシニアライフ、どちらも2025年に向けて、ぜひとも具体化させていきたい事業と思ってます。ご一緒させていただける機会があれば、これらの事業の推進に向けて、みなさんの英知、ネットワークをぜひともお借りしたいと思ってますので、その節にはご支援、ご指導のほどよろしくお願ひします！

以上